

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅵ

泉南市文化財調査報告書 第二十五集

1994. 3

泉南市教育委員会



## 序 文

わが国初の24時間世界に開かれた国際空港として建設が進められてきた泉州空港も、その開港をいよいよ本年秋にむかえることとなりました。私どものまちでは、日々期待に胸をふくらませているところでございます。

しかしこの間、市域では非常に多くの開発が進められ、これにともなって埋蔵文化財の発掘調査は急増してまいりました。市ではこれに対し、貴重な文化財を後世に残し伝えるという現代人の責務を果たすべく、文化財保護活用事業を展開してまいりました。

このようななかで、貴重な文化財は非常に多くの事実を私たちに伝えてくれました。特に近年は歴史情報の蓄積が進み、古代の泉南の姿がより鮮明によみがえってきております。

これからも、私どもの郷土に残された先人の遺産を保護・活用し、現代社会との調和をはかり、泉南市の「歴史の風薫るまち」づくりに生かして行きたいと考えております。

文末ではございますが、これまでご指導・ご協力いただきました皆様に心からお礼申し上げますとともに、今後も倍旧のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成6年3月

泉南市教育委員会

教育長 赤井 悟

## 例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成5年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当・実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡一彦を担当者として、平成5年4月1日着手し、平成6年3月31日終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、田上信一、土井憲代、松下徹をはじめ、愛洲みさ子、油野健介、阿波屋昌樹、安楽征恵、石川和男、岩橋良典、上野友紀代、氏田英利、江尻和歌子、江尻美代子、大上文子、大川美佳、大西和歌子、奥田邸史、小野祐子、梶本禎之、久世佐紀子、久保真理、蔵田弘幸、後登雅博、坂本直子、柴田祐子、真珠久美、高石洋行、竹野栄晃、玉置由紀、豊島かおり、長谷典彦、八羽康代、濱野淳、巴山忍、日垣愛、廣尾昌之、府中淑恵、榭谷容子、丸谷昌央、三浦功土、宮沢薫、村上佳子、山田朋宏、山本紀子、横井佐絵子、若狭里美、若山敦諸君らの協力を得た。  
また、広瀬和雄、芝野圭之助、榭本哲、田中一廣、土井孝之、鈴木陽一、向井俊生、谷美光の諸氏からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は岡田・石橋・岡が行なった。執筆の分担は目次に記した。編集は仮屋・岡田がおこなった。
5. 出土遺物の写真撮影は、立花正治氏の手を煩わせた。記して感謝の意を表する次第である。
6. 遺物実測は土井憲代、真珠久美、横井佐絵子が行い、挿図図版作成は石橋・岡が、図版作成は主に岡田が行った。
7. 本調査にあたっては、写真・スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。

## 凡 例

1. 各調査区には個別の番号をつけている。番号の基本構成は「遺跡名称（記号）－年度－通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、光平寺跡－KH、幡代遺跡－HT、岡中遺跡－OK、海宮宮池遺跡－KG、新家オドリ山遺跡－OD、中小路西－NKW、仏性寺跡－BS、岡田遺跡－OKD、男里北遺跡－ONNである。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現した。なお本報告書では報告文は遺跡毎に章だてしているため、基本的に各章中では遺跡名称を省略している。
2. 図中の方位は、各調査区位置図・地形図及び図版PL. 1～3では真北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。
3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+値（m）である。
4. 遺構名称はアルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットはSB－建物、SD－溝、SK－土坑、SX－性格不明遺構、Pit－柱穴をそれぞれ表す。
5. 遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、須恵器－黒塗り、土師器－白抜き、瓦器・瓦質土器－トーンのように塗り分けた。
6. 遺物実測図版および挿図と写真図版では、遺物番号は統一している。
7. 第5表とPL. 1・2の番号は一致させた。

# 目 次

第1章 調査の経過 .....	(岡田) .....	1
第2章 男里遺跡の調査 .....		7
第1節 既往の調査 .....	(岡田) .....	7
第2節 93-1区の調査 .....	(岡) .....	9
第3節 93-2区の調査 .....	(石橋) .....	11
第4節 93-3区の調査 .....	(石橋) .....	13
第5節 93-4区の調査 .....	(石橋) .....	14
第6節 93-5区の調査 .....	(岡) .....	15
第7節 93-6区の調査 .....	(石橋) .....	16
第8節 92-10区の調査 .....	(岡) .....	18
第3章 光平寺跡の調査 .....	(岡) .....	20
第1節 既往の調査 .....		20
第2節 93-1区の調査 .....		20
第4章 幡代遺跡の調査 .....	(岡) .....	23
第1節 既往の調査 .....		23
第2節 93-2区の調査 .....		24
第3節 92-2区の調査 .....		25
第4節 92-3区の調査 .....		26
第5章 岡中遺跡の調査 .....		28
第1節 既往の調査 .....	(石橋) .....	28
第2節 93-1区の調査 .....	(岡) .....	29
第3節 93-2区の調査 .....	(石橋) .....	31
第6章 海宮宮池遺跡の調査 .....	(石橋) .....	33
第1節 既往の調査 .....		33
第2節 93-1区の調査 .....		34
第7章 新家オドリ山遺跡の調査 .....	(石橋) .....	36
第1節 既往の調査 .....		36

第2節 93-1区の調査 .....	37
第8章 中小路西遺跡の調査 .....	41
第1節 既往の調査 .....	41
第2節 93-1区の調査 .....	42
第9章 仏性寺跡の調査 .....	47
第1節 既往の調査 .....	47
第2節 93-1区の調査 .....	48
第10章 岡田遺跡の調査 .....	51
第1節 既往の調査 .....	51
第2節 93-1区の調査 .....	52
第3節 93-2区の調査 .....	53
第4節 92-1区の調査 .....	55
第11章 まとめ .....	56
報告書抄録 .....	巻末

## 挿 図 目 次

第1図	男里遺跡93-1区地形図	9
第2図	男里遺跡出土の遺物	10
第3図	男里遺跡93-2区地形図	11
第4図	男里遺跡93-3区地形図	13
第5図	男里遺跡93-4区地形図	14
第6図	男里遺跡93-5区地形図	16
第7図	男里遺跡93-6区地形図	17
第8図	男里遺跡92-10区地形図	18
第9図	光平寺跡93-1区地形図	21
第10図	光平寺跡93-1区出土の土器	22
第11図	光平寺跡93-1区出土の平瓦	22
第12図	幡代遺跡調査区位置図	24
第13図	幡代遺跡93-1・93-2・92-2・92-3区地形図	25
第14図	岡中遺跡調査区位置図	29
第15図	岡中遺跡93-1区地形図	30
第16図	岡中遺跡93-2区地形図	31
第17図	海宮宮池遺跡及び仏性寺跡調査区位置図	34
第18図	海宮宮池遺跡93-1区地形図	35
第19図	新家オドリ山遺跡調査区位置図	36
第20図	新家オドリ山遺跡93-1区地形図	38
第21図	新家オドリ山遺跡93-1区出土の石器	39
第22図	新家オドリ山遺跡93-1区内採集遺物	40
第23図	中小路西遺跡及び岡田西遺跡調査区位置図	41
第24図	中小路西遺跡93-1区地形図	43
第25図	仏性寺跡93-1区地形図	48
第26図	岡田遺跡調査区位置図	51
第27図	岡田遺跡93-1・92-1区地形図	53

第28図 岡田遺跡93-2区地形図 .....	54
-------------------------	----

## 表 目 次

第1表 発掘および試掘届出一覧表 .....	3
第2表 発掘調査一覧表 .....	4
第3表 試掘調査一覧表 .....	5
第4表 立会調査一覧表 .....	6
第5表 文化財一覧表 .....	60

## 図 版 目 次

PL. 1 泉南地域の文化財	
PL. 2 泉南地域の地形分類	
PL. 3 男里遺跡・光平寺跡・男里北遺跡調査区位置図	
PL. 4 男里遺跡調査区	
PL. 5 光平寺跡・幡代遺跡・岡中遺跡・海宮宮池遺跡 ・新家オドリ山遺跡調査区	
PL. 6 中小路西遺跡93-1区平面図及び断面図	
PL. 7 仏性寺跡・岡田遺跡調査区	
PL. 8 中小路西遺跡93-1区出土の土器	
PL. 9 男里遺跡93-1区	
PL. 10 男里遺跡93-2区①	
PL. 11 男里遺跡93-2区②・93-3区	
PL. 12 男里遺跡93-4区・93-5区	
PL. 13 男里遺跡93-6区・92-10区	
PL. 14 光平寺跡93-1区	
PL. 15 幡代遺跡93-2区	
PL. 16 幡代遺跡92-2区・92-3区	

- PL. 17 岡中遺跡93-1区・海宮宮池遺跡93-1区
- PL. 18 岡中遺跡93-2区
- PL. 19 新家オドリ山遺跡93-1区
- PL. 20 中小路西遺跡93-1区①
- PL. 21 中小路西遺跡93-1区②
- PL. 22 中小路西遺跡93-1区③
- PL. 23 仏性寺跡93-1区①
- PL. 24 仏性寺跡93-1区②・岡田遺跡93-1区
- PL. 25 岡田遺跡93-2区
- PL. 26 岡田遺跡92-1区
- PL. 27 男里遺跡93-1・93-2区出土の遺物
- PL. 28 光平寺跡93-1区及び新家オドリ山遺跡93-1区出土の遺物
- PL. 29 中小路西遺跡93-1区出土の土器①
- PL. 30 中小路西遺跡93-1区出土の土器②
- PL. 31 中小路西遺跡93-1区出土の土器③

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅺ

## 第1章 調査の経過

市域の西に広がる大阪湾では、開港をまじかにひかえる関西国際空港の建設事業が進められてきた。これにともない、この10年間で市域での開発件数は爆発的に増加した。また、公共事業においても市民生活の基盤整備・拡充がはかられ、これも増加の一途をたどっている。これらによる埋蔵文化財の調査件数の増加は言うまでもなく、しかも近年は各調査とも1件あたりの面積が増大しているのである。傾向としては慢性的に作業量が増大していく、という状況で今後は更に作業量が増大していくであろうことは想像に難くない。

このような状況のもと、今年度も市域の各所、多くの遺跡において、個人住宅建設等に伴う調査を多数実施した。以下、遺跡毎にその経過を簡単に触れることとする。

市域西縁に位置する男里遺跡は長径1.5km、短径1.3kmに及ぶ広大な広さを誇る大遺跡である。過去に非常に多くの調査が行われ、種々様々な情報が獲得され蓄積されつつある。これまでは主に小面積の発掘調査がその多くを占めていたが、近年府道新設に伴う大規模調査も行われており新たな知見が得られている。とはいえ、その内包するであろう情報のごく一部しか知られていないことは明らかで、まだまだ不分明なところが多い。本年度ここでは合計6カ所の発掘調査をおこなった。中でも、93-1区では古代の所産とおぼしき柱掘方が発見されている。

男里遺跡の西部に位置する光平寺跡では、これまで1カ所調査が行われたのみで、その内容などはまだほとんど明らかにされていない。ただ、平安時代の所産となる軒丸瓦を中心とし多量の瓦が出土しており、往時の姿のごく一部をうかがい知ることができる。ここでは今年度1件の調査が行われ、土坑が発見された。

幡代遺跡ではここ数年来の調査の増加により、その内容が徐々に明らかにさ

れつつある。とくに昨年より市道拡幅に伴って行われた調査や今回報告できた92-3区の調査などから、遺構分布範囲が明確にされ、遺跡の内容究明にむけ大きな一歩を踏み出したといえよう。また、男里遺跡同様ここでも府道の調査が行われており、様々な情報が明らかにされつつある。今年度の調査件数は1件である。

岡中遺跡は比較的最近発見された遺跡である。これまでに室町期の土坑墓群や中世寺院跡などの存在が知られていたが、当該時期の集落関連遺構は発見されていなかった。しかし、今年度おこなわれた調査では土坑やピットが確認され、集落の位置推定が可能となってきている。本年は2件の調査が行われた。

市域の東部、樫井川左岸流域の遺跡に目を向けよう。

海宮宮池遺跡はこれまでほとんど調査が行われていなかった。今年度行われた調査が、今後の内容究明に向けての貴重な第一歩となったといえよう。

新家オドリ山遺跡は市域でも比較的早い時期に発掘調査が行われている遺跡である。しかしその後大部分で地形が改変されていることもあって調査件数は少なく、内容はさほど明らかにはされていなかった。しかし、今年度調査では遺構を確認することができ、今後の当遺跡における調査の指標となる成果があがっている。

中小路西遺跡は、今報文の中でも最も発見から日が浅い遺跡である。このため、発掘調査例はなく、その内容はまったく不明であった。しかし、ここでは今年度調査により遺構が検出されたうえ、良好な中世土器の一括資料を確認することができた。

仏性寺跡の発掘調査も決して多くを数えないが、過去の調査において、多くの中世屋瓦と寺院関連の整地層の存在が確認されている。今年度は、ただ1カ所ではあるが、遺跡のほぼ中心部にあたる位置で調査を実施した。

岡田遺跡ではこれまで比較的短期間の間に、多くの調査が積み重ねられている。これにより周辺の遺跡を含めると、縄文時代以降近・現代に至る大規模な遺跡群であることがうかがえる。なかでも中世に位置づけられる集落関連遺構が確認されており、当該期の集落の範囲追求が当面の課題と言える。このようななかで、今年度調査区では遺跡の北端付近でも遺構が検出されている。

以上の各遺跡における調査区、位置、申請者、規模、用途、調査年月は第2表に示したとおりである。

第1表 平成5年度発掘及び試掘調査届出一覧表

平成6年2月28日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )
5年・3	1	221.63	2	1,569.18	3	1,790.81
4	1	277.00	2	1,866.74	3	2,143.74
5	5	2,275.125	4	27,082.74	9	29,357.865
6	3	89,099.39	4	2,948.92	7	92,048.31
7	5	25,295.28	2	13,992.75	7	39,288.03
8	3	1,073.59	1	1,144.51	4	2,218.10
9	0	0	2	1,468.51	2	1,468.51
10	5	1,413.07	1	590.55	6	2,003.62
11	9	2,486.02	0	0	9	2,486.02
12	5	11,794.34	1	1,161.36	6	12,955.70
6年・1	8	35,987.35	7	26,865.119	15	62,852.469
2	4	435.11	2	1,713.83	6	2,148.94
合 計	49	170,357.905	28	80,404.209	77	250,762.114

第2表 発掘調査一覧表

平成6年2月28日現在

No	遺跡名	地区名	位置	申請者	面積 (㎡)	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	93-1区	男里		277.00	住宅新築	5年4月	本書掲載
2	男里遺跡	93-2区	男里		1,229.06	共同住宅	5年5月	同上
3	男里遺跡	93-3区	男里		330.59	住宅新築	5年9月	同上
4	男里遺跡	93-4区	男里		516.76	住宅新築	5年4月	同上
5	男里遺跡	93-5区	馬場		294.50	店舗	5年6月	同上
6	男里遺跡	93-6区	男里		401.95	宅地造成	5年10月	同上
7	男里遺跡	92-10区	男里		301.50	住宅新築	5年2月	同上
8	男里北遺跡	93-1区	男里		23,831.58	倉庫	5年7月	トレンチ2カ所設定。土師器・瓦器の細片が極少量出土した。(PL.3)
9	光平寺跡	93-1区	男里		183.91	住宅新築	5年12月	本書掲載
10	幡代遺跡	93-1区	幡代		60.00	道路拡幅	5年12月	別書掲載
11	幡代遺跡	93-2区	幡代		756.87	住宅新築	5年10月	本書掲載
12	幡代遺跡	92-2区	幡代		173.37	住宅新築	5年2月	同上
13	幡代遺跡	92-3区	幡代		501.46	住宅新築	5年2月	同上
14	岡中遺跡	93-1区	信達岡中		606.295	住宅新築	5年7月	同上
15	岡中遺跡	93-2区	信達岡中		762.91	住宅新築	5年8月	同上
16	海岩宮池遺跡	93-1区	信達大苗代		221.63	住宅新築	5年4月	同上
17	新家オドリ山遺跡	93-1区	新家		626.36	住宅新築	5年5月	同上
18	中小路西遺跡	93-1区	中小路		796.26	遊技場	5年7月	同上
19	中小路西遺跡	93-2区	中小路		10,617.00	宅地造成	一次5年2月 二次6年1月 ~2月	現在整理中
20	中小路南遺跡	93-1区	中小路		7,577.20	共同住宅	6年1月 ~	現在継続中
21	仏性寺跡	93-1区	信達市場		1,247.81	共同住宅	5年7月	本書掲載
22	岡田遺跡	93-1区	岡田		760.00	住宅新築	5年6月	同上
23	岡田遺跡	93-2区	岡田		743.27	倉庫	5年6月	同上
23	岡田遺跡	93-3区	岡田		110.97	店舗付住宅	6年2月	現在整理中
23	岡田遺跡	92-1区	岡田		260.00	住宅新築	5年3月	本書掲載
24	岡田西遺跡	93-1区	中小路		15,303.13	トラックターミナル	5年6月	トレンチ3カ所設定したが遺構・遺物は検出されなかった。(第23図)
25	氏の松遺跡	93-1区	岡田		11,228.00	道路新設	5年11~ 6年3月	別書掲載
26	君ヶ池	93-1区	掘井		35,000.00	公園造成	6年1月	トレンチ9カ所設定したが遺構・遺物は検出されなかった。

第3表 試掘調査一覧表

平成6年2月28日現在

No	遺跡名	位置	申請者	面積(㎡)	用途	調査年月日	備考
1	範囲外	信達市場		641.81	工場新築	5年3月5日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	信達市場		838.60	共同住宅	5年3月12日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	樽井		998.00	共同住宅	5年3月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	信達牧野		2,059.22	共同住宅	5年4月28日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	樽井		927.37	店舗	5年5月7日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	中小路		800.00	老人保健施設	5年5月17日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	馬場		979.84	分譲住宅(7戸)	5年6月8日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	信達牧野		1,215.90	開発・造成	5年6月21日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	信達六尾		1,290.00	軽費老人ホーム(ケアハウス)	5年6月25日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	信達市場		969.84	共同住宅	5年7月1日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	信達大苗代		389.84	店舗	5年7月5日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	信達牧野		786.24	マンション建設	5年7月12日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	信達牧野		783.00	倉庫新築	5年8月4日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	信達牧野		12,900.00	府立砂川厚生福祉センター	5年9月6日～30日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	信達大苗代		1,015.59	宅地造成	5年10月14日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	樽井		452.92	住宅	5年10月28日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	信達市場		590.55	共同住宅	5年12月7日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	新家		917.11	共同住宅	5年12月24日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
19	範囲外	信達牧野		9,000.00	公園整備	6年1月19日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	信達市場		1,144.51	専用住宅	6年1月31日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	信達牧野		2,383.43	分譲住宅	6年2月7日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
22	範囲外	岡田		1,768.34	共同住宅	6年2月9日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
23	範囲外	男里		850.35	共同住宅	6年2月23日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

## 第4表立会調査一覧表

平成6年2月28日現在

No	遺跡名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月日	備 考
1	増田池	信達岡中		350.00	堤体工事	5年3月3日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	男里遺跡	男里		50.00	水路改修	5年3月8日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	男里遺跡 光平寺跡	男里		621.70	ガス管埋設	5年4月27日 ～28日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	岡田西遺跡	中小路		178.20	電話地下線	5年8月3日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	新家古墳群	新家		214.78	個人住宅	5年10月12日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	高田山古墳群	幡代		297.49	個人住宅	5年11月19日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	中之池	樽井		90.00	堤体工事	5年11月29日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	増田池	岡中		250.00	堤体工事	5年12月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	新家オドリ山遺跡	新家		2.75	ガス管埋設	5年12月6日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	高田山古墳群	幡代		231.40	個人住宅	5年12月10日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	高田山古墳群	幡代		1.50	ガス管修繕	5年12月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	岡田遺跡	岡田		236.00	道路改修	6年11月10日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	芦谷池	信達市場		600.00	堤体工事	6年1月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	中之池	信達市場		500.00	堤体工事	6年1月21日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	下村遺跡	新家		46.60	農業水路工	6年1月25日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	新家古墳群	新家		0.75	ガス管埋設	6年1月27日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	仏性寺跡	信達市場		5.80	ガス管埋設	6年2月1日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	座頭池	岡田		250.00	堤体改修	6年2月3日 ～4日	遺構・遺物は確認されなかった。
16	男里遺跡	男里		41.25	ガス管移設	6年2月10日	遺構・遺物は確認されなかった。
17	男里遺跡	男里		150.00	水路改修	6年2月22日	遺構・遺物は確認されなかった。

## 第2章 男里遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2・3）

男里遺跡は市域の北西端を区切る男里川の右岸流域に展開する複合遺跡である。これまでのところでは、縄文時代晩期から現代に至るまで、断続的ながらも連綿と生活する先人の「足跡」を確認することができている。遺跡の規模は現状で長径約1.5km、短径約1.3kmと市域最大の規模をほこり、その大きさ故か地形分類的にも氾濫原・自然堤防・旧河道そして沖積段丘面と非常に複雑な様相をみせている。大まかに分けると遺跡の西縁、現在の男里集落が位置している部分は自然堤防、反対に遺跡の東縁付近は沖積段丘面に区分されている。特に当遺跡のランドマークとも言うべきものに、遺跡ほぼ中央に位置する双子池がある。当池は男里川の旧河道痕跡であり、旧河道は遺跡を南北に貫流していることがうかがえる。そしてこの東西部分に広い氾濫原を形成しているわけである。現在の集落は主に自然堤防上や段丘面上に占地し、氾濫原部分はもっぱら広大な耕作地となっている。

では、これまでの調査の歴史を概観してみよう。

男里遺跡における調査の嚆矢は古く昭和5年、遺跡内の土砂を搬出中に弥生土器などが発見されたことに始まる<sup>①</sup>。その後、田畑から多くの遺物が採集され広くその存在が知られてきた。

この後、長らく地元の研究者らによる調査活動にその内容究明はゆだねられてきた。なかでも彼らの地道な踏査活動によりその分布範囲が確認されてきたことは、当遺跡における調査の歴史を知る上で非常に大事なポイントと言えよう。

そして、70年代中頃より行政機関による発掘調査が開始されることとなる。同時に調査件数も漸増傾向を見せる。これらの調査は小規模調査が主体であるが、広く遺跡の全域で行われ男里遺跡の具体的内容を徐々ではあるが、確実に知らしめることとなった。

この頃、双子池上池周辺では弥生時代集落の存在が推定され、同池の西側部分では奈良・平安時代の集落が、またより西側の自然堤防上では鎌倉時代の集

落が確認されつつあった。

80年代前半からは主に市教育委員会が調査の任につくこととなる。この頃より調査数も激増することとなり、非常に多くの発見があいついだ。主な調査成果に、遺跡北部での縄文時代晩期の遺構・遺物群の発見、双子池周辺における弥生時代集落の確認とこれに隣接する木棺墓群の検出、男里川旧河道の一部確認などがある。この頃から、男里遺跡の具体像把握はスピードを増したわけである。

80年代後半から90年代にかけて、市域全域でも遺跡の新規発見があいつぎ、同時に男里遺跡の縁辺部分で遺構の分布範囲がより広範囲におよんでいることが確認されることとなった。この頃から、弥生時代以降の遺構分布の変遷追求、古代の当地周辺における生産基盤の推定<sup>②</sup>、広大な遺跡内に複数存在する中世集落の動向を推定させ得るデータの確認<sup>③④</sup>、遺跡内の微地形復原<sup>⑤</sup>などがなされ、男里遺跡の内容究明にむけての基礎的データがどんどん集積してきたと言えよう。

前年度の調査では古墳時代の所産となる溝と一括資料が確認されたうえ、遺跡の北東部での遺構分布範囲の拡大等が確認されている<sup>⑥</sup>。古墳時代遺構の分布範囲を知る上で非常に貴重なデータが獲得されたといえる。

そして現在にかけて、遺跡を縦貫する府道新設にともない、大規模な発掘調査が行われている。また、周辺の調査では新たな遺跡の発見が続いている。これらにより、近い将来男里遺跡及びその周辺の歴史像がより鮮明に現代によみがえるものとなるだろう。

このように当遺跡における調査の歴史を概観してきた。もちろんこれまでに繰り返し述べてきたように、やはりまだまだ不明な点が多いといえる。しかしゆっくりとだが着実にデータの蓄積が進んでおり、徐々に当地の歴史再構成が進められていることは疑いない。同時に、近年新たな複数の視点から蓄積されたデータを検討することができるようになった。このことも、男里遺跡が内包する情報の分析に大きな力となることは言うまでもない。

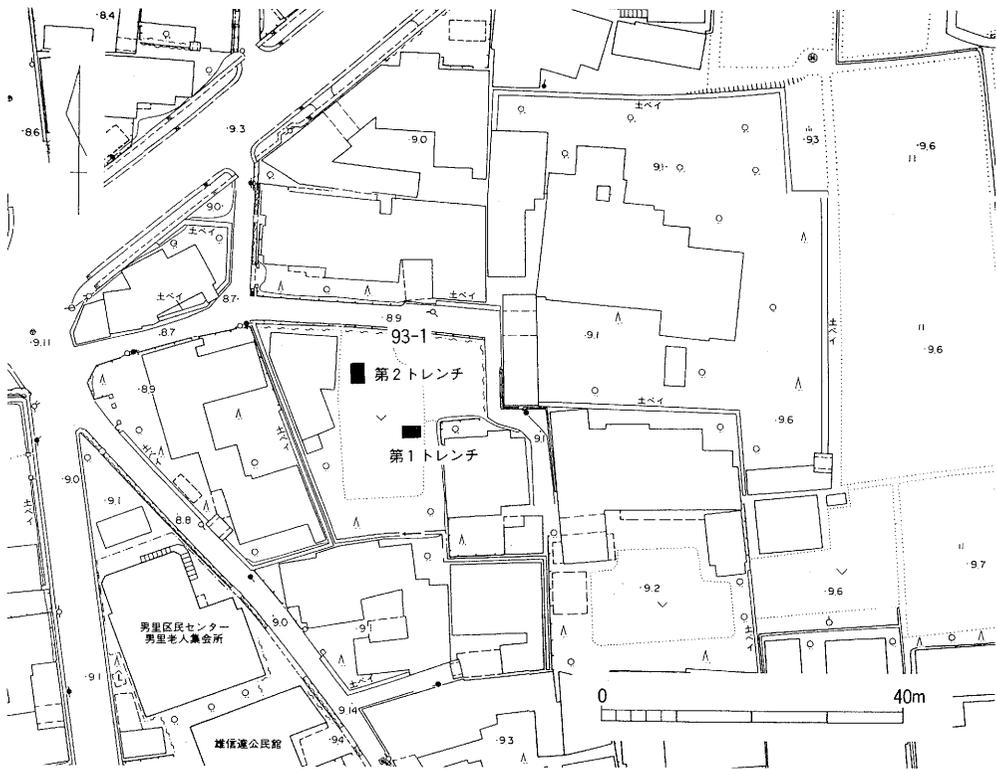
これからの調査成果を期待していきたい。

## 第2節 93-1区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第1図)

調査地は、府道堺阪南線の「男里」交差点から東に50mほど入った地点に位置している。地形分類上では男里川右岸の自然堤防上に立地していることになる。過去の調査地周辺における調査では北東約50mの地点で古墳時代の小石室<sup>⑦</sup>が、南東約150mでは古代の掘立柱建物が検出されており、当該期の遺構が密集している地域である。

トレンチは2カ所を設定した。



第1図 男里遺跡93-1区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・9)

第1トレンチでは、約40cmの暗黄褐色土を除去すると、約5cmの暗灰色土が堆積し、以下は暗褐色粘質土が露呈する。第2トレンチの堆積状況から考える

と、当トレンチ付近は北に向かって緩やかに傾斜する微高地の一部であり、後世に削平をうけた可能性が高い。遺構は当層上面で検出した。

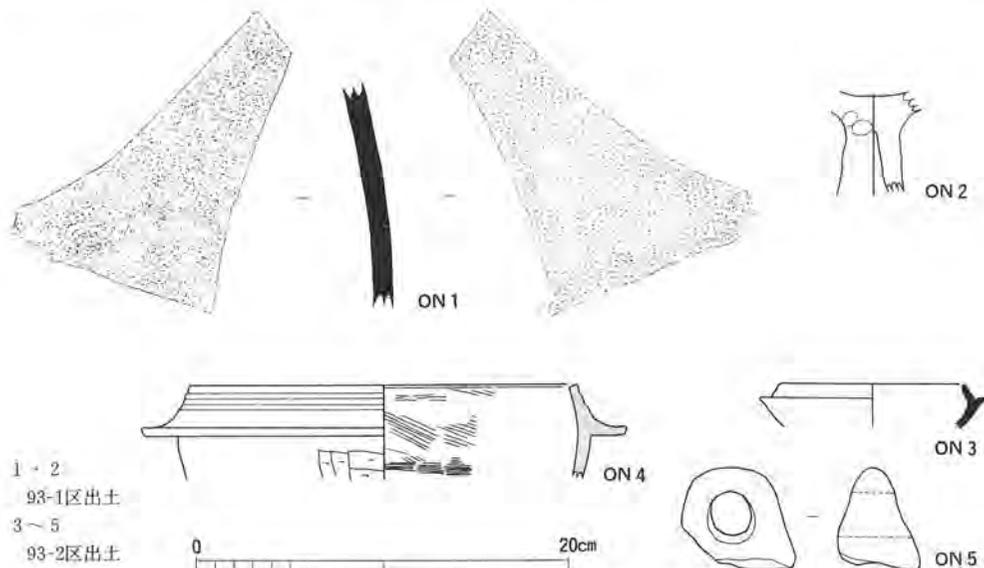
第2トレンチの層序は第I層・暗黒色の表土（約20cm）、第II層・暗黄褐色土（約10cm）、第III層・茶褐色混じり灰色土（10～20cm）、第IV層・暗茶褐色混じり灰色砂質土（約20cm）、第V層・暗黄褐色砂質土（約20cm）、第VI層・暗褐色粘質土と続く。遺構・遺物は認められない。

### 3. 遺構（P L. 4・9）

第1トレンチで検出した遺構はピット1カ所である。ピットの柱掘方は径約70cmの隅丸方形を呈し、深さ45cmを測る。柱痕跡は径約20cmを測る。埋土は柱掘方が暗黄褐色混じり黒褐色土、柱痕跡が黒褐色土である。掘立柱建物を構成するものと考えられるが、調査面積自体が小規模なため、建物の規模・主軸方向等は不明といわざるを得ない。

### 4. 遺物（P L. 27、第2図）

以下に記述する遺物は2点とも第1トレンチで検出した柱掘方の埋土からの出土である。1は須恵器甕の体部である。外面は平行叩きののち、ナデ調整、



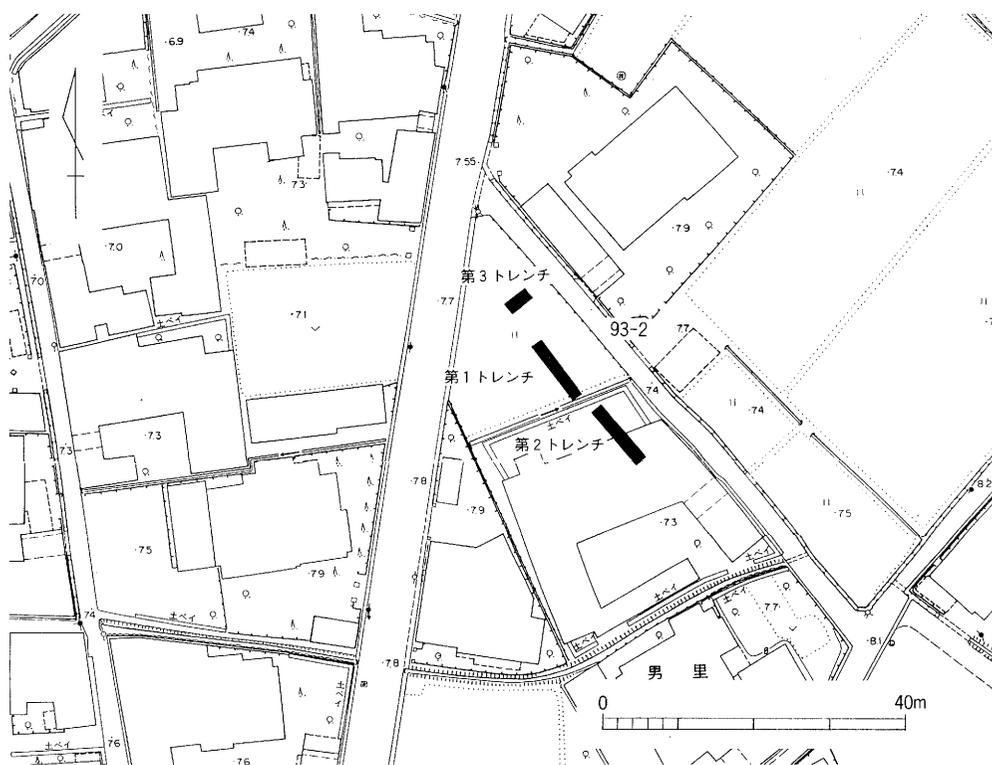
第2図 男里遺跡出土の遺物

内面はナデ調整を行い、同心円文が残る。胎土に砂粒を含み、色調は灰色を呈する。2は高坏の脚部である。胎土には0.5～1mmの砂粒を多く含み、橙色を呈する。

### 第3節 93-2区の調査

#### 1. 位置 (P.L. 3、第3図)

調査区は、現在の男里集落の中心からやや北東よりで、府道堺阪南線「男里」交差点より北へ約200mの地点に位置する。地形的には男里川の氾濫原または自然堤防上に立地するものと思われる。トレンチは全部で3カ所設定した。



第3図 男里遺跡93-2区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 4・10・11)

第1～3トレンチの基本的な層序としてはすべて同じと考えてよいであろう。第1トレンチは、耕土はすでに失われており、現代の床土を除去すると4層

の旧耕土層が約50cmにわたってトレンチ全面に認められた。これらの下層には暗褐色シルト層が約10cmほど存在し、さらにこの層を掘り抜くと河川性の堆積の砂礫層が認められ、著しい湧水が始まる。このため、砂礫層の上面では遺構の存在の可能性が低いため、暗褐色シルト層の上面で検出を行ったが遺構は確認できなかった。

第2トレンチは、中央部分が後世に大きく攪乱されている。旧耕土においては第5層が認められないが、そのほかは第1トレンチと同じである。また第8層の青灰色粘質土層は、第6層の暗褐色シルト層が還元された状態のようである。この下層には砂礫層が存在する。ここでも青灰色粘質土層の上面で遺構検出を行ったが遺構を確認することはできなかった。

第3トレンチでは、現代の耕作土が存在した。これらの下層には第1トレンチと同じ旧耕土が確認されたが、第6層の暗褐色シルト層はトレンチのごく一部にしか存在せず、砂礫層がすぐに露呈した。第3トレンチが、最も男里川に近い所に位置しており、川の方角に向かって砂礫層が多く認められる傾向を示すものであろう。なお第3トレンチでこの砂礫層を掘削してさらに下層の確認を行った。しかし、約1.5m程掘削するものの、砂礫層にほとんど変化は認められなかった。

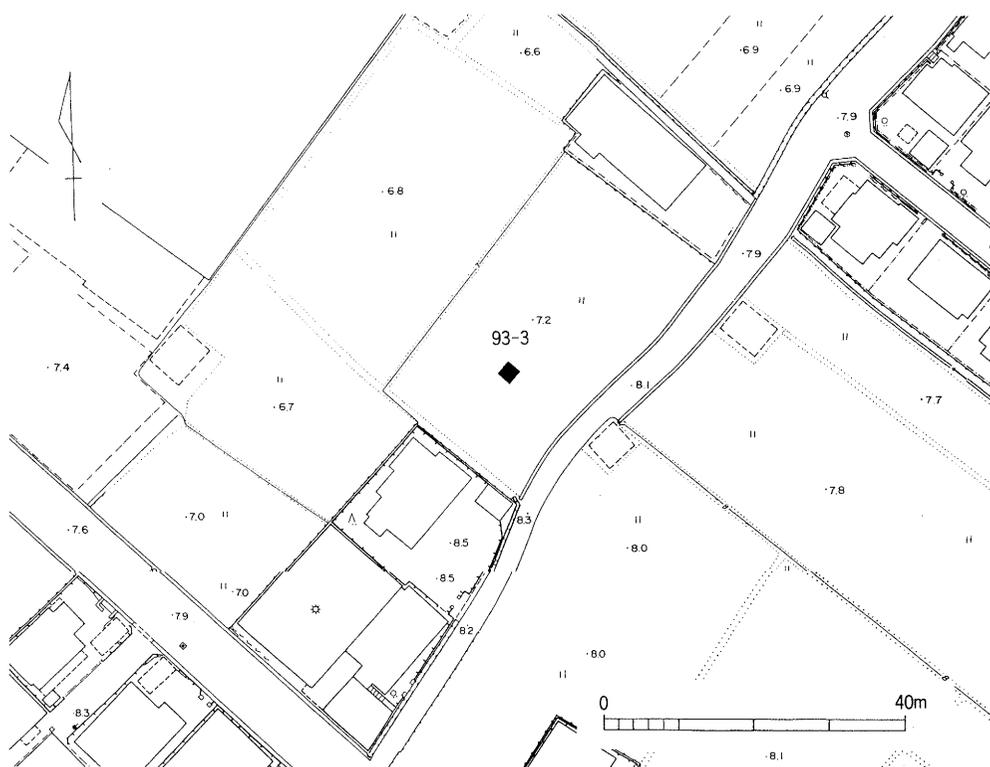
### 3. 遺物 (P.L. 27、第2図)

遺物は、旧耕土層から少量出土した。3は須恵器の杯である。第1トレンチから出土している。口縁部の立ち上がりはかなり退化したもので、6世紀代末期の所産であろう。復元口径は9.9cmを測り、灰色を呈する。4は瓦質の羽釜である。第3トレンチより出土している。口縁部は内彎しながら立ち上がる。外面に段をつけ、端部は平らに仕上げられている。体部外面にはヘラケズリを施し器壁を薄く仕上げている。内面はハケ目による調整が施される。罎部はヨコナデによる調整が施されて、端部は平らに仕上げられている。黒褐色を呈し、復元口径は20.6cmを測る。5は土師質の把手の部分である。第1トレンチから出土している。蛸壺の紐掛け部分の可能性が高い。この孔径は約2cmを測る。全体に摩滅が著しく、胎土は粗く灰白色を呈する。

## 第4節 93-3区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第4図)

調査区は、男里遺跡の北部、双子池の北方約200m、府道堺阪南線「男里北」交差点より北へ約150mに位置する。地形的には男里川の旧河道が推定されている。これまで付近の水田などでかなり多くの調査が行われてきたが、昨年度、ここより南西へ約100mの地点で古墳時代後期の水路が検出されている<sup>④</sup>。



第4図 男里遺跡93-3区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 4・11)

盛土を約1mと現代の滋味土を除去すると、灰黄褐色の旧耕土層が認められる。この下層には、旧耕土と考えられる褐灰黄色シルト層、暗灰褐色シルト層がそれぞれ約10cm程存在し、かなり水分を含んでいる。これらの下層には暗褐色の砂礫層が存在し、著しい湧水に見まわれた。この結果から、調査区はまさ

に男里川の旧河道の上面に位置すると考えてよいであろう。

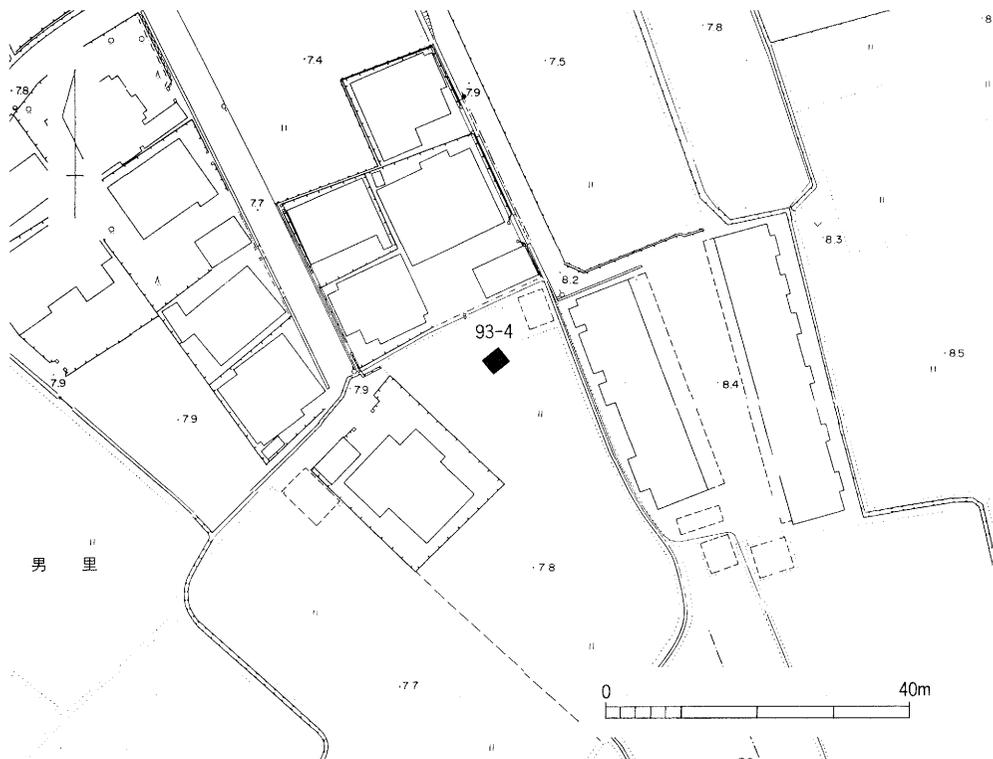
遺構は検出することはできなかった。また、遺物は、旧耕土層より土師器片が少量出土したが、いずれも図化できるものはなかった。

## 第5節 93-4区の調査

### 1. 位置（P L. 3、第5図）

調査区は、遺跡の北東部に位置し、府道堺阪南線から北へ約200mほどの場所に位置する。調査区に接して、府道樽井男里線新設に伴う調査が（財）大阪府埋蔵文化財協会によって今年度実施されている。

地形的には、男里川の氾濫原または、沖積段丘面上に立地するものと思われる。



第5図 男里遺跡93-4区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 4・12）

現代の耕作土と床土を約20cm除去すると、褐灰色シルト層と褐色シルト層がそれぞれ約20cmと10cmにわたってみられる。いずれも旧耕土と考えられる。これらを除去すると黒褐色の礫を含んだシルトが約10cmほど存在し、暗褐色の礫を含んだ地山に至る。地山は部分的に黄褐色を呈しており、礫のないシルトだけの部分もある。いずれの層も水平堆積で、上層からの攪乱を受けたような形跡はない。遺構検出は4、5、6層の上面で合計3回行った。そのうち遺構が確認されたのは6層だけである。

遺物は、いずれの層からも出土しなかった。

## 3. 遺構（P L. 4・12）

土坑を1基検出した。一部はトレンチ外へのびているが、検出長は約2m、幅40～80cm、深さ10～30cmを測り、不整形を呈する。埋土は黒色のかかなりきめの細かいシルトである。遺物は出土しなかった。また遺構の性格についても不明である。

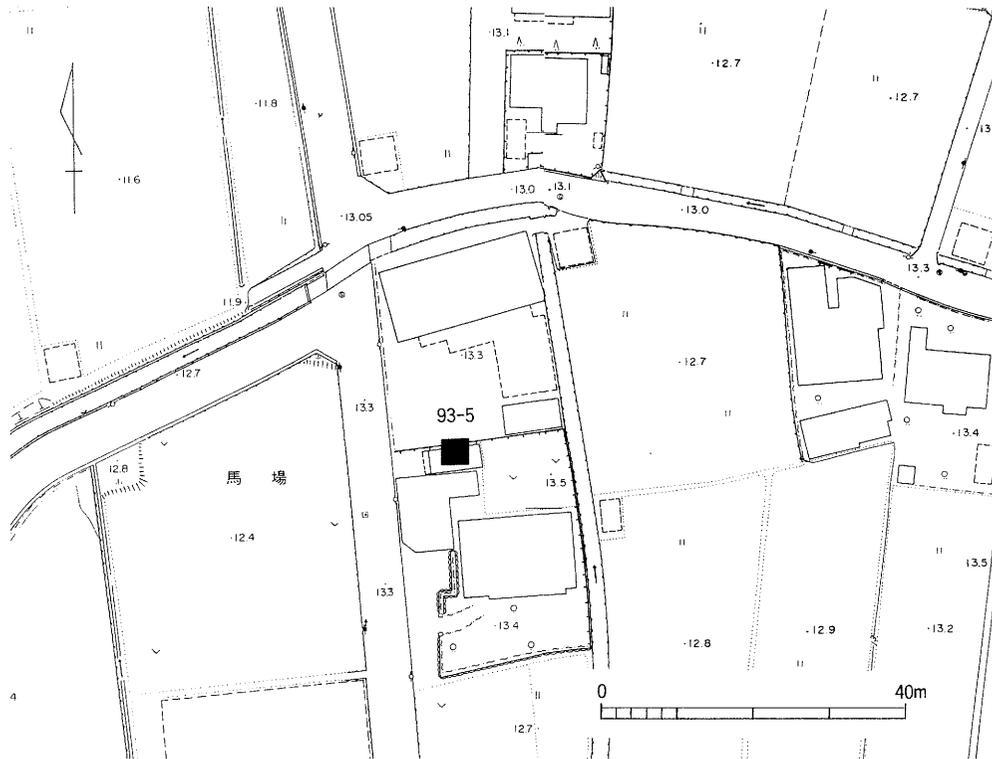
## 第6節 93－5区の調査

### 1. 位置（P L. 3、第6図）

調査区は遺跡の中央東よりに位置しており、遺跡を南北に縦断する市道樽井馬場鬼木線に面している。地形分類上では沖積段丘縁辺に立地していることになる。付近では古代の建物を構成すると考えられる柱掘方や中世の溝などが検出されており、男里遺跡内でも遺構密度が高い部分である。また、以前の調査において、市道を境にして東側と西側では何らかの段差の存在が推測されている地点にあたる<sup>⑩</sup>。あるいは沖積段丘と男里川によって形成された氾濫原の境界線に相当するのかもしれない。トレンチは1カ所を設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 4・12）

基本的な層序は、第I層は大部分が耕作土によって構成される盛土層（約90



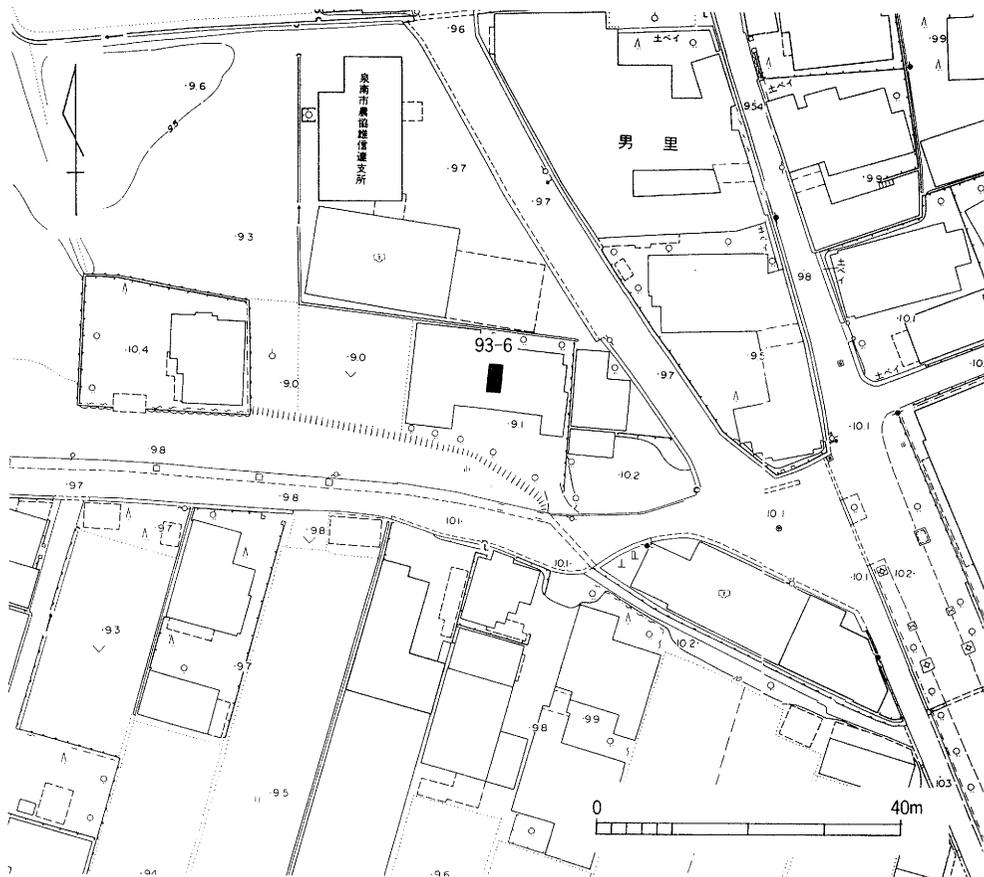
第6図 男里遺跡93-5区地形図

cm)である。以下、第II層・褐色土(約10cm)、第III層・褐灰色土(約10cm)、第IV層・明黄褐色土(約10cm)、第V層・褐色混じり淡灰色土(約5cm)、第VI層・褐色粘質土(約10cm)、第VII層・黒褐色混じり褐色粘質土(約10cm)、第VIII層・黒褐色粘質土(約30cm)となり、各層ともに水平堆積を呈している。地山は暗黄褐色粘質土である。遺物は第V層から土師器片が出土したが細片のため図化できなかった。遺構は確認できなかった。

## 第7節 93-6区の調査

### 1. 位置(PL. 3、第7図)

調査区は、遺跡の東端に位置し、市立雄信小学校の西約50mの地点である。地形的には男里川の自然堤防上に立地するものと考えられる。



第7図 男里遺跡93-6区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 4・13)

現代の表土と床土を除去すると、暗灰褐色シルトと褐色シルトがそれぞれ約20cmほど認められる。いずれも旧耕土と考えられる。これらの下層には灰色の礫層が約20cm程認められた。人為的な盛土と考えられ、近代の遺物も含んでいる。この層を掘削すると粗砂を多く含んだ暗黄色砂礫層となる。この層は下層に行くほど人頭大の川原石を多く含むようになり、男里川的作用による自然堆積と考えられる。遺物は、近代以降の瓦や挿鉢等が少量出土した。遺構は確認することができなかった。

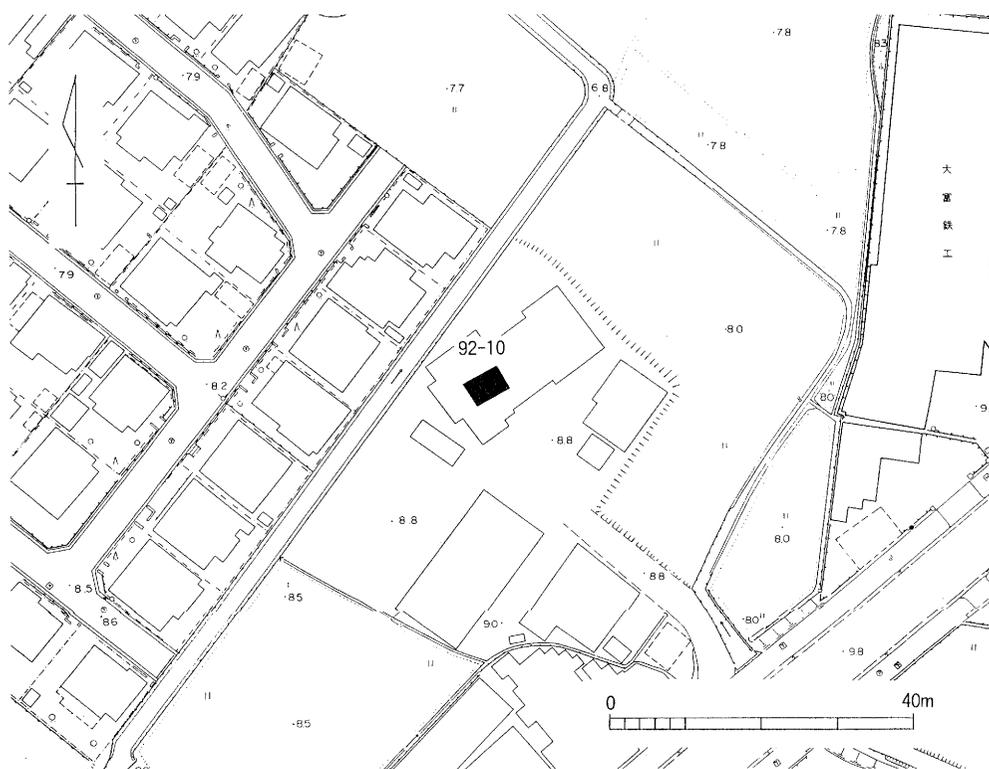
なお、近隣の人々の聞き取りによると、大正時代この地域は大規模に水田開発を行ったことがあり、この時かなりの整地を施したということである。このことから第8層の礫層はこの時の整地層である可能性が高い。

## 第8節 92-10区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第8図)

調査地は遺跡中央部のやや北側、府道堺阪南線から約50m海側に入った場所に位置している。地形分類上では旧男里川によって形成された氾濫原上に立地していることになる。調査地すぐ北側では府道樽井男里線の新設に伴い、平成4年度に(財)大阪府埋蔵文化財協会によって調査が行なわれている。

トレンチは1カ所を設定した。



第8図 男里遺跡92-10区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・13)

層序は、第I層・盛土(約60cm)、第II層・旧耕土に相当する灰色土(約10cm)、第III層・灰黄色土(約20cm)と続き、以下第IV層・褐色土(約10cm)、第

V層・黒褐色粘質土（約40cm）、第VI層・地山である暗黄褐色土が認められる。遺物は、第IV層から土師器片が一点出土しているが、細片で図化し得ない。また、遺構は確認できなかった。

- 註 ① 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書III』（1982）
- ② 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』（1988）
- ③ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書VII』（1990）
- ④ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書VIII』（1991）
- ⑤ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）
- ⑥ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
- ⑦ 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』（1986）
- ⑧ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1980）
- ⑨ ⑥と同じ。
- ⑩ ⑥と同じ。

## 第3章 光平寺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P L. 1・2・3）

光平寺跡は男里遺跡の西端部、男里川の支流である金熊寺川と菟砥川が合流する右岸に位置し、それらの川の氾濫によって形成された自然堤防上に立地している。現在、大阪府の有形文化財に指定されている正平24年（1369）銘を持つ石製五輪塔が所在している。

今日までの調査は昭和52年に大阪府教育委員会によって行われた1件のみであるが、平安時代後期に比定される仏像文軒丸瓦が出土しており、府下において仏像文としては最南端の出土例として知られている。当該期は泉南市域で中世寺院が急増する時期にあたり、光平寺もそのひとつと考えられるが、調査例の少なさもあいまって他の寺院と同様にどのような経緯をたどったのかは明らかではない。

男里遺跡における中世の集落は過去の調査によって光平寺跡周辺を中心とした地点に占地することが明らかになっており、当寺院とその集落がどのような有機的なつながりをもって展開していたのかは今後の調査によって明らかにすべき課題であろう。

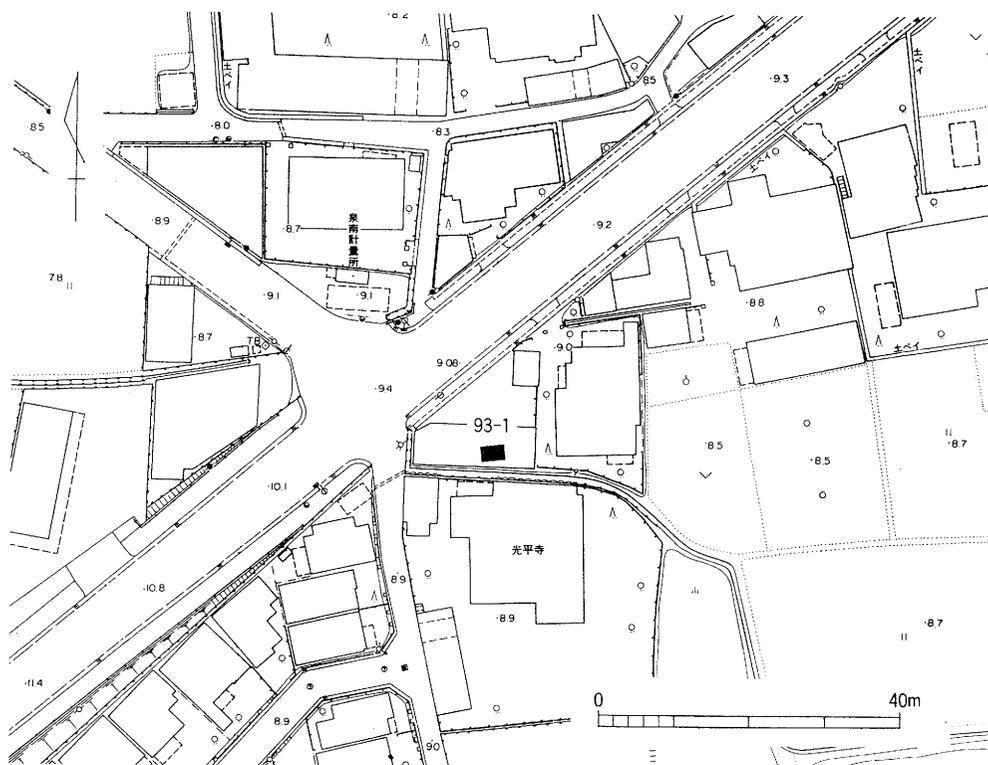
### 第2節 93-1区の調査

#### 1. 位置（P L. 1・2・3、第9図）

調査区は男里遺跡の北西部に位置し、現在の光平寺の北側、府道堺阪南線に面した場所に位置している。地形分類上では自然堤防上に立地していることになる。トレンチは1カ所を設定した。

#### 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 5）

層位は第Ⅰ層・盛土（約60cm）を除去すると、第Ⅱ層・人頭大の石を含む暗灰色土（約30cm）が露呈する。以下、第Ⅲ層・暗褐色土（20～30cm）、第Ⅳ層・



第9図 光平寺跡93-1区地形図

暗茶褐色土（5～10cm）、第Ⅴ層・灰色混じり黒褐色土と続く。遺構は当層上面で検出した。

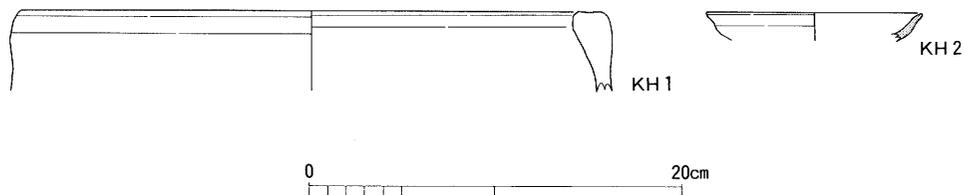
### 3. 遺構（P L. 5・14）

検出した遺構は土坑（S K01）1カ所である。トレンチ外に拡がるため、全形は知り得ないが、検出最大幅76cm、最深部の深さが20cmを測る。埋土は褐色混じり灰色粘質土である。

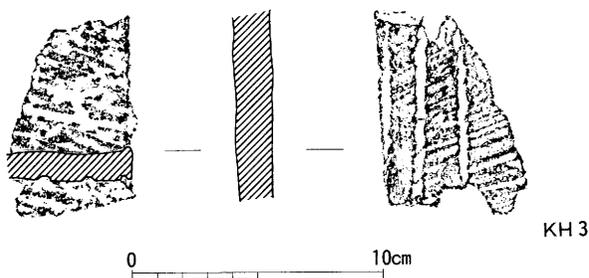
### 4. 遺物（P L. 28、第10・11図）

数点の遺物が出土しているが図化し得たのは3点のみである。1は甕の口縁部である。復元口径28.4cmを測る土師質製品で、口縁部は内側に肥厚し、端部は平面を成す。口縁部外面及び体部内面はヨコナデを施すが体部外面は未調整である。胎土には1～3mm程度の砂粒を含み、外面はにぶい黄橙色、内面が暗

茶色を呈する。S K01から出土している。2は瓦器皿である。口縁部はヨコナ  
 デを施し、内外面ともに灰色を呈する。盛土からの出土である。3はS K01出  
 土の平瓦である。かなり薄手の製品で、凸面は荒い縄叩きを施し、糸切り痕が  
 明瞭に残る。凹面は剝離が著しいがわずかに布目圧痕が残る。焼成はやや甘く  
 灰色を呈する。



第10図 光平寺跡93-1区出土の土器



第11図 光平寺跡93-1区出土の平瓦

註 ① 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』(1990)

## 第4章 幡代遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第12図）

幡代遺跡は泉南市の西部、金熊寺川の中流右岸に位置し、その旧河道によって形成された沖積段丘面上に立地している。南側には幡代南遺跡、北側は国道26号線を境として男里遺跡が所在している。

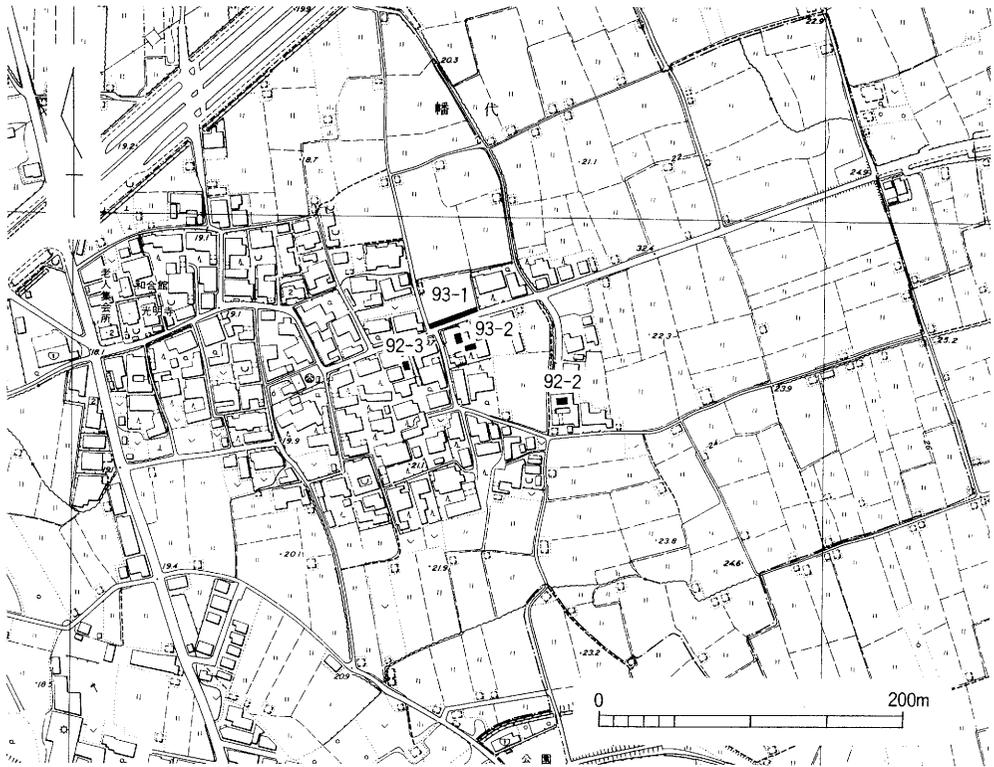
当遺跡はこれまで、昭和59年に大阪府教育委員会によって調査が行われて以来、小規模ながら毎年調査件数が増加しており、遺跡の内容が解明されつつある。現在のところ平安時代後期・室町時代、そして近世と大きく3時期の盛期が確認されており、また僅かながらも弥生土器の出土も認められることから、今後の調査<sup>①</sup>によってその盛期がさらにさかのぼる可能性があるだろう。

また、最近では調査が及んでいなかった遺跡東部においても中世の集落の一部と考えられる遺構や遺物包含層が確認されるなど新たなデータが獲得されてきている。

現在、遺跡内には『釈迦堂』『踊り堂』といった寺院に関連すると思われる小字が残っており、過去の調査からも中世の瓦が多数出土していることから考えると、同時期の寺院の存在が推定される。また遺跡東部では広大な農地が広がっており北で約20°西偏する地割が確認でき、『六ノ坪』『二十一坪』といった小字が残ることから、以前から条里地割の存在も指摘<sup>②</sup>されている。

このように、当遺跡周辺は泉南市域の歴史を考える上で、貴重な資料を数多く内包している地域といえるであろう。しかし近年、他の遺跡同様に開発の波が当遺跡にも押し寄せており、遺跡内を縦断するように大規模な道路建設が予定されるようになった。それに伴いさらに多くの開発に伴う調査が今後増加していくことは明らかであり、さらに当遺跡の内容究明のための多くの情報を得ることができるだろう。しかし、それと引き替えに遺跡周辺は大きくその景観を変えていくことは間違いのないことである。

今後、先人が残してくれた貴重な歴史情報を後世に残し伝えていくことが我々の大きな使命であると再確認したい。



第12図 幡代遺跡調査区位置図

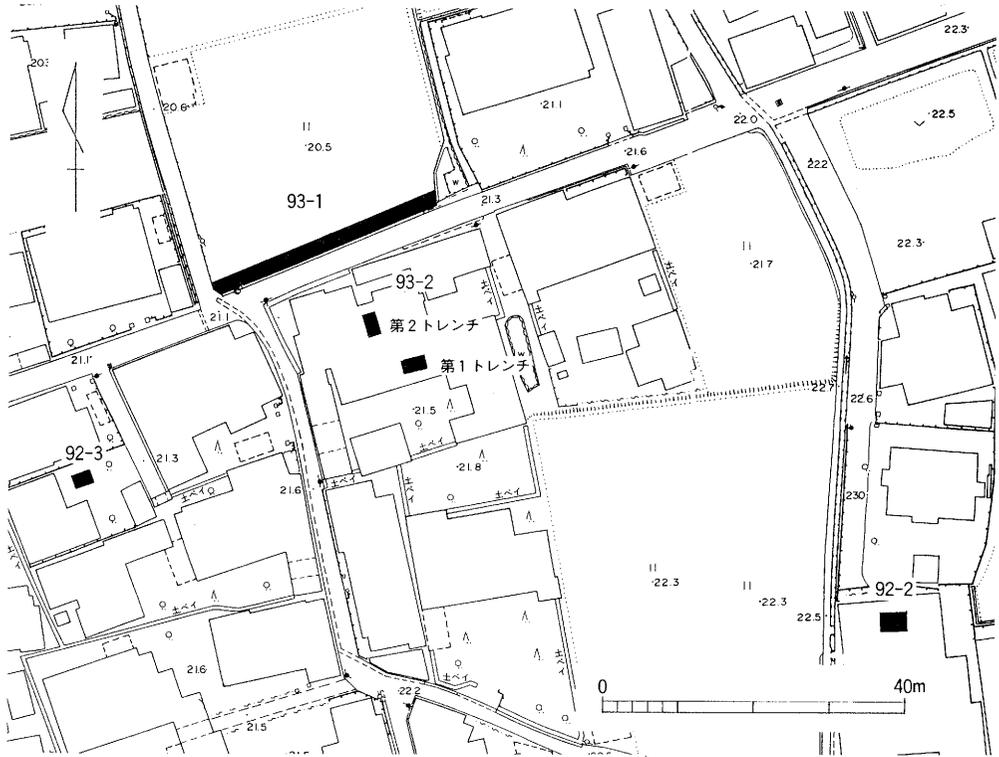
## 第2節 93-2区の調査

### 1. 位置 (第12・13図)

調査地は遺跡の中央部、現在の幡代集落のやや東寄りに位置している。地形分類的には沖積段丘面上に立地していることになるが、近年の調査によって、旧金熊寺川によって形成された氾濫原が確認されつつあり、当遺跡周辺における旧地形復原のためのデータが徐々に蓄積されているといえる。トレンチは2カ所を設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 5・15)

層序は第1トレンチでは、第I層・現表土 (20~30cm)、第II層・暗茶褐色土 (20~30cm)、第III層・灰色混じり暗褐色土 (約5cm)、第IV層・砂礫混じり黒褐色粘質土である。地山は確認できなかった。遺物は第III層から土師器の細



第13図 幡代遺跡93-1・93-2・92-2・92-3区地形図

片が出土したが図化できなかった。第2トレンチは、第I層・現表土（20～30cm）、第II層・茶褐色土（約20cm）、第III層・暗茶褐色土（約20cm）、第IV層・砂礫混じり黒褐色粘質土（約20cm）、第V層黒褐色粘質土（約10cm）、第VI層・黒褐色粘質土（約10cm）、第VI層は地山の暗褐色土である。第IV層以下は湧水が認められた。遺物はいずれの層からも出土しなかった。また遺構は第1トレンチ・第2トレンチともに確認できなかった。

### 第3節 92-2区の調査

#### 1. 位置（第12・13図）

調査地は遺跡のほぼ中央部分、現在の幡代集落の東部に位置している。地形分類上では沖積段丘面に立地しており、周辺においては現在も利用されている農耕用の井戸や湧水池などが存在しており、地下水脈の存在が予想されている

地点でもある<sup>③</sup>。建物が解体された後の更地にトレンチを1カ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 5・16)

層序は第Ⅰ層・盛土(約10cm)下に第Ⅱ層・旧耕土(約10cm)及び第Ⅲ層・旧床土(約10cm)が堆積する。以下は第Ⅳ層・灰黄色土(約5cm)、第Ⅴ層・しまりの悪い灰色混じり黄褐色土(約5cm)、第Ⅵ層・黄褐色土(約5cm)、第Ⅶ層・やや色調の薄い黒褐色土(約30cm)と続く。この上面において遺構検出を行なったが遺構は確認できなかった。また、一部にかなり粘性の強い黒褐色土が認められたため部分的に掘削をおこなった。T.P+21.5m付近まで掘り下げた結果、変化が現われず地山までは達することができなかった。当層は拳大のクサリレキを多量に含んでいることから、旧金熊寺川の氾濫原の一部と考えて相違ないだろう。遺物は灰黄色土より土師器片が1点出土したが細片のため図化できなかった。

## 第4節 92-3区の調査

### 1. 位置(第12・13図)

調査区は現在の幡代集落の中央よりやや南東側に位置しており、92-2区の北西約100mの地点である。地形分類上ではやはり沖積段丘面上に立地していることになる。建物跡の更地にトレンチを1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 5・16)

現地表面から-80cmまでは砂礫と茶褐色系の土とが互層状になった盛土である。以下は地山の暗黄褐色土となり、西から東へ向かって約20cmの比高差で緩やかに傾斜している。遺物包含層はまったく確認できなかった。

調査地は最近まで昭和初期に建てられたと伝えられる倉庫が存在していたらしく、このことからその前後の時期に削平、造成されたと考えることができるだろう。

### 3. 遺構（P L. 5・16）

遺構は地山の上面において、土坑（S K01～03）を3カ所検出した。土坑は楕円形ないし不整円形を呈し、深さはそれぞれ5～10cm程度の比較的浅いものである。埋土はすべて灰色砂質土の単一層で遺物がまったく出土しないため、時期・性格等は不明といわざるを得ないが、おそらく耕作に伴い形成されたものであろう。

註 ① 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1990）

② ①と同じ。

③ ①と同じ。

## 第5章 岡中遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（PL. 1・2、第14図）

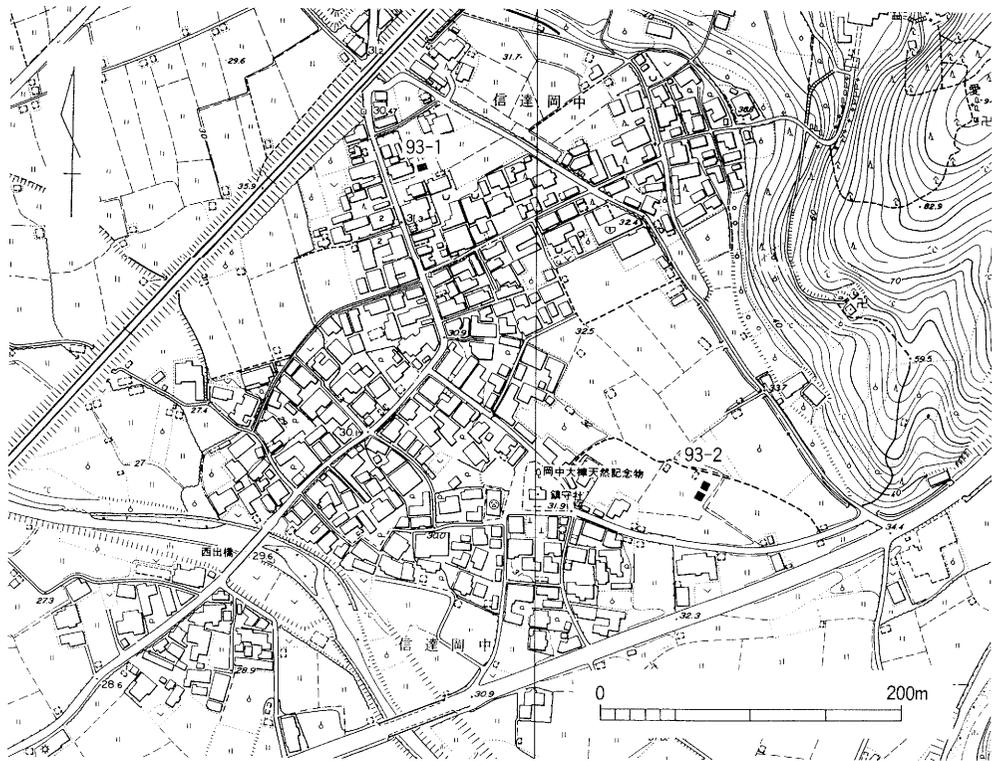
岡中遺跡は、昭和62年度に試掘調査によって発見された遺跡である。発見からまだそれほど時間は経っていないものの、これまでに小規模ながら相当数の調査が行われた結果、多くのデータが得られている。

地形的には金熊寺川右岸に立地し、現在の岡中集落をほぼ包括している。岡中集落は山側と川側の2つの集落が合併して一つになったといわれている。その川側の集落の東方には、岡中鎮守社があり、境内には府指定天然記念物である大樟と近年指定されたばかりの槇の木が存在する。

これまでの調査では、この大樟西側の調査において、平安時代後期を初源とする寺院の存在の可能性や、遺物包含層が確認されている<sup>①</sup>。また、集落の南東端では、室町時代に属する土坑墓群が氾濫原上につくられていたことが確認されている<sup>②</sup>。

また、最も注目されるのは、遺跡から東方約200mに所在する、標高約100mの愛宕山に存する林昌寺の境内に瓦窯が2基以上存在することが確認されていることであろう<sup>③</sup>。時期的には、平安時代末から鎌倉時代に比定され、この中から出土した軒丸瓦は、岡中遺跡内で出土したものと同範であることが確認されており、この瓦窯から岡中遺跡の寺院に供給されたことが明らかになっている。同時に、この同範の軒丸瓦は、岸和田市畑遺跡でも出土していることが近年明らかになっている<sup>④</sup>。

このように、岡中遺跡は、集落部分はいまだ未発見ながら寺院を中心とした集落であることが推定される。そして、この寺院は平安時代末期から中世初頭に突如出現する。また、寺院に瓦を供給した林昌寺瓦窯の瓦は、かなり広範囲に拡がっていることをみると、泉州一帯の何らかの勢力による開発集団の想定も可能となる。今後、考古学的なデータと文献などのデータをつき合わせることで岡中遺跡だけでなく、泉南市全体の中世寺院と集落とのつながりが明らかにされて行くことと期待される。



第14図 岡中遺跡調査区位置図

## 第2節 93-1区の調査

### 1. 位置 (P.L. 5、第14・15図)

調査地は当遺跡の北部に位置している。現在の岡中集落の南側を蛇行して流れる金熊寺川によって形成された沖積段丘上に立地している。トレンチは1カ所を設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 5・17)

第I層・盛土(約10cm)を除去すると、第II層・暗黄褐色混じり灰色土(約10cm)が露呈する。以下、第III層・マンガン混じり灰黄色土(約15cm)、第IV層・明黄褐色土(約5cm)、第V層・褐色土(約10cm)、第VI層・暗褐色土(約10cm)の堆積が確認された。以下は第VII層の人頭大～拳大の円礫を多量に含んだ黒褐色粘質土となる。当層はこれまでの調査において男里遺跡を中心にな



第15図 岡中遺跡93-1区地形図

りの広範囲でその堆積が確認されており、今回の調査で新たなデータが獲得されたといえる。

### 3. 遺構 (P.L. 5・17)

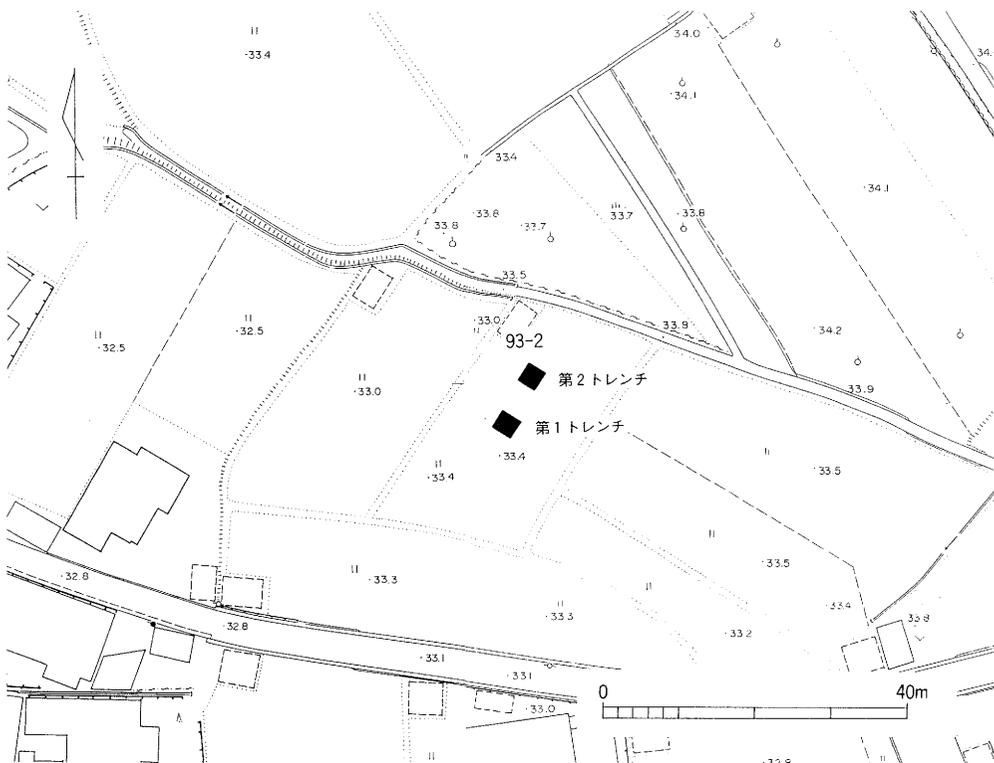
第Ⅶ層上面でピット (Pit 1・2)、土坑 (S K01) を検出した。Pit 1は楕円形を呈し、最大径20cm、深さ8cm、Pit 2はトレンチ外に拡がるためその全形は確認できないが、深さ3cm程度の浅いものである。S K01も大部分がトレンチの外に拡がり、深さ4cmと浅い。埋土はいずれも暗褐色土である。遺物がまったく出土しないためいずれの時期の所産か断定できないが、当面直上の第Ⅵ層から瓦器の細片が出土するためそれ以前の時期であることは間違いないであろう。

### 第3節 93-2区の調査

#### 1. 位置 (第14・16図)

調査区は、現在の岡中集落の南東端にあたり、府指定天然記念物大樟からは東へ約100mの地点である。これより西約70mの場所で室町時代の土坑墓群が<sup>⑥</sup>見ついているため今回の調査でこの土坑墓群の広がりが非常に注目された。地形的には、金熊寺川の氾濫原上に立地するものと思われる。

トレンチは2カ所設定した。



第16図 岡中遺跡93-2区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 5・18)

第1トレンチでは、現代の滋味土と床土を約20cm除去すると、黒褐色の礫を含んだシルト層が約10cm程確認された。礫は直径数cmの円礫ばかりである。さらにこの層を掘削すると、暗褐色の砂礫層となった。上層同様に円礫を多く含

み、金熊寺川の作用によるものであろう。遺構検出は黒褐色シルト層と暗褐色砂礫層の2面で行ったがいずれの層にも遺構は確認できなかった。

第2トレンチでは、現代の滋味土と床土を除去すると、旧耕土にあたると思われる暗灰黄色のシルト層が約10cmにわたって認められた。この下層には第1トレンチ同様、黒褐色のシルト層、暗褐色砂礫層が存在する。同様に2面で遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。

遺物は、5層の暗灰黄色シルト層より土師器片が少量出土しているがいずれも図化できるものはなかった。

註 ① 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1990）

② 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』（1988）

③ 泉南市・泉南市教育委員会「中世の都市と農村」（1991）

④ 93年4月17日摂河泉古瓦研究会の検討会、大阪市立博物館特別陳列「私たちの考古学摂河泉の古瓦Ⅱ」において。

⑤ ②と同じ。

⑥ ②と同じ。

## 第6章 海宮宮池遺跡の調査

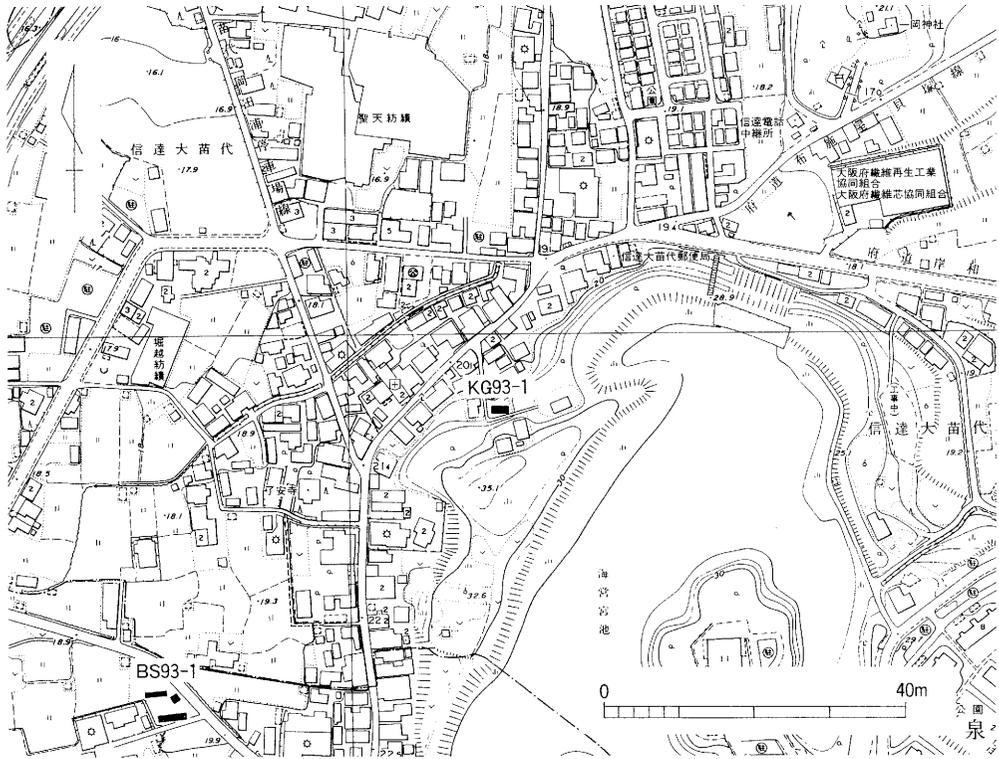
### 第1節 既往の調査（PL. 1・2、第17図）

遺跡の名称になっている海宮宮池は、「大苗代丘陵」と呼ばれる丘陵地帯の先端部分の谷状地形を利用して造られた溜め池である<sup>①</sup>。地形的には高位段丘面に立地し、地質的には、大阪層群で構成されているものと思われる。遺跡は、この海宮宮池の北西部分の堤を中心にして池の内外に、径約300m×180mの範囲で存在する。

遺跡発見の契機は、1972年にこの池の堤の内部傾斜面で木葉形尖頭器が1点採集されたことによるもので、泉南市内では比較的古くから遺跡として周知されている<sup>②</sup>。しかし、遺跡の立地場所からもきているが、現在までほとんど調査は行われることがなかったのが事実である。そのため採集された木葉形有舌尖頭器がどのような層に含まれていたかなど、遺跡の基本的な層序はまったく不明の状態である。

市内の遺跡に目を転じてみたい。海宮宮池遺跡の尖頭器が採集された時点では、これが泉南市内では最も古い遺物となっていた。しかし、現在では着実にこの時代の資料は増加しつつある。

尖頭器は泉南市内では現在のところ、有舌尖頭器が、金熊寺川流域の滑瀬遺跡<sup>③</sup>と海沿いの岡田西遺跡<sup>④</sup>からそれぞれ1点ずつ出土しており、また、同じ滑瀬遺跡ではこれよりさらに時期の遡る国府型ナイフ形石器が1点出土している。これ以外に少し時期は下るものの、岡田東遺跡では縄文時代早期後半に属する押型文を有する土器が発見されており<sup>⑤</sup>、泉南市内の旧石器時代から縄文時代初頭のデータは、除々に蓄積されつつある。今後の海宮宮池遺跡の調査の進展によって遺跡の性格、ひいてはこの時期の泉南市域の遺跡の動向をつかむことができるであろう。



第17図 海営宮池遺跡及び仏性寺跡調査区位置図

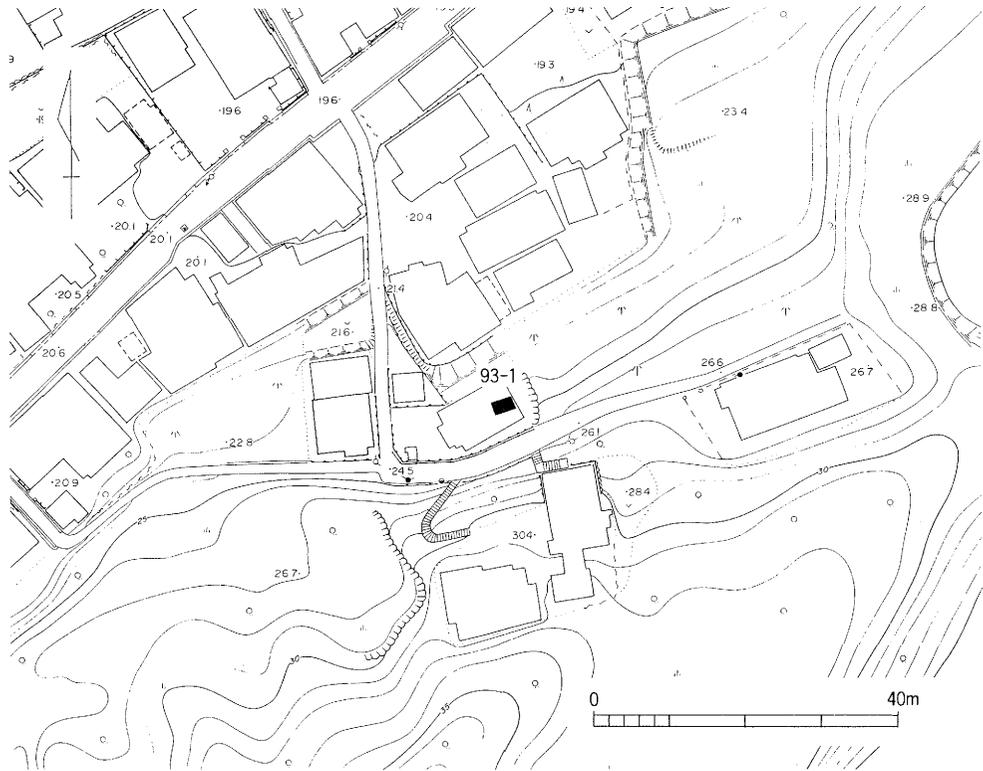
## 第2節 93-1区の調査

### 1. 位置 (第17・18図)

調査区は、遺跡の南東端の海営宮池の堤へやや上がった斜面部で、平坦にされている部分に位置する。かつては竹林として利用されていたようで、かなりの竹の根がみられた。地形的には先述のとおり高位段丘面にあたる可能性が高いが、海営宮池の堤の盛土上の可能性もあった。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 5・17)

約20cmの盛土を除去すると、灰黄色のシルト層が厚さ約5cmほどみられる。土の質はきめ細かくほとんど粘土に近い。かなりもろく、ぼそぼその状態で笹や竹の根によって攪乱されているようである。この層を掘削すると黄灰色のシルト層に至る。2層同様に非常にきめが細かく、非常に固く締まっている。ま



第18図 海宮宮池遺跡93-1区地形図

た砂・礫をまったく含んでいない。この層の上面で検出を行ったが遺構は確認されなかった。またこの下層を約50cm程掘削したが、まったく変化を認めることはできなかった。また、遺物は出土しなかった。

以上のことから、海宮宮池の堤は、この調査区の地点では盛土を施さず、自然地形を利用したものであることが明らかになった。また、今回、地山としてとらえた黄灰色の極めてしまったシルト層は、現段階では確証はないものの大阪層群の可能性が高い。

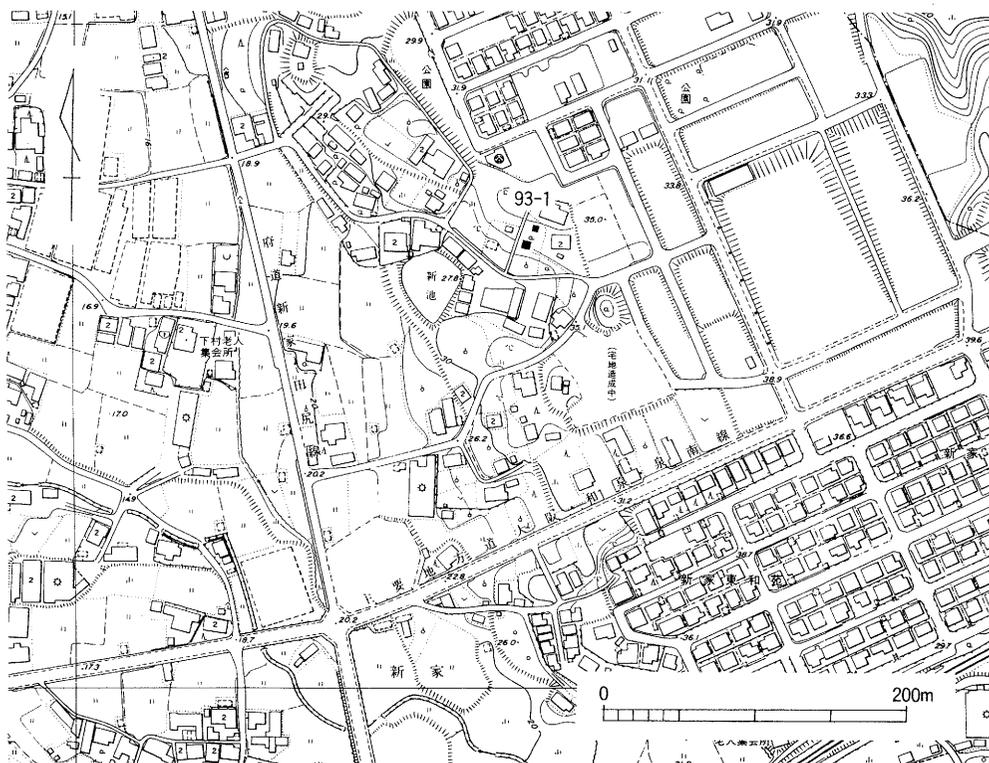
- 註 ① 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』（1986）  
 ② 泉南市史編纂委員会『泉南市史 資料編』（1982）  
 ③ 富加見泰彦他『滑瀬遺跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会（1987）  
 ④ 泉南市教育委員会『岡田西遺跡現地説明会資料』（1992）  
 ⑤ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）

## 第7章 新家オドリ山遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（PL. 1・2、第19図）

遺跡は、泉南市内においては、山側から海側へ向かって何本かの丘陵が走っているが、そのうち最も泉佐野市よりの「檜井丘陵」と呼ばれる丘陵の先端付近に位置している。現在丘陵部分は、新家楠台団地と呼ばれる住宅地となっている<sup>①</sup>。この住宅地から海側に向かっては大きく展望が開けており、神戸方面から淡路島までが一望できる。

遺跡の発見の契機は、1977年にこの住宅建設の為に造成が行われる際の試掘調査によるもので、1979年に本調査が行われている。調査結果については、正確な図面や実測図が公表されていない為詳しいことは不明であるが、丘陵の全面にわたって弥生時代中期後半に属する竪穴住居が16棟検出されたとのことで



第19図 新家オドリ山遺跡調査区位置図

ある。この集落は周辺との比高差約20mを測り、大阪湾へ開ける眺望を考えた立地を見る限り、高地性集落の一つとして評価されてよいであろう<sup>②</sup>。

周辺の遺跡に目を転じると、丘陵の南東側に府道大阪和泉南線に面した部分に新家オドリ山南遺跡、丘陵北東部に新家オドリ山東遺跡が周知されているが、かつての宅地造成に伴う調査のどの部分に当たるかは不明である。弥生時代のそのほかの遺跡としては新家川をはさんで南東側に方形周溝墓の検出された向井山遺跡、同じくその中間地点に中期の土器を出土した新家遺跡<sup>③</sup>が存在する。これら2つの遺跡は時期的にも共通するものがあり、非常に注目される。

古墳時代中期以降、丘陵上ではさかんに古墳が造られるようになる。新家古墳群、フキアゲ山古墳群、兎田古墳群など、ほとんどが樫井川へ向かって落ちる丘陵の東側に築かれている。その中で注目されるのは、遺跡の中に下村2号墳と呼ばれる古墳が1基含まれている。現在はまったくその姿をとどめていないが、横穴式石室を有する6世紀代の古墳であると伝えられており、丘陵の西斜面にも古墳が何基か存在した可能性が窺えるのである。

宅地造成に伴う調査以降、ほとんど調査が行われていなかったが、僅かながら破壊を逃れた部分については今後、保存を考えた慎重な調査が必要となるであろう。

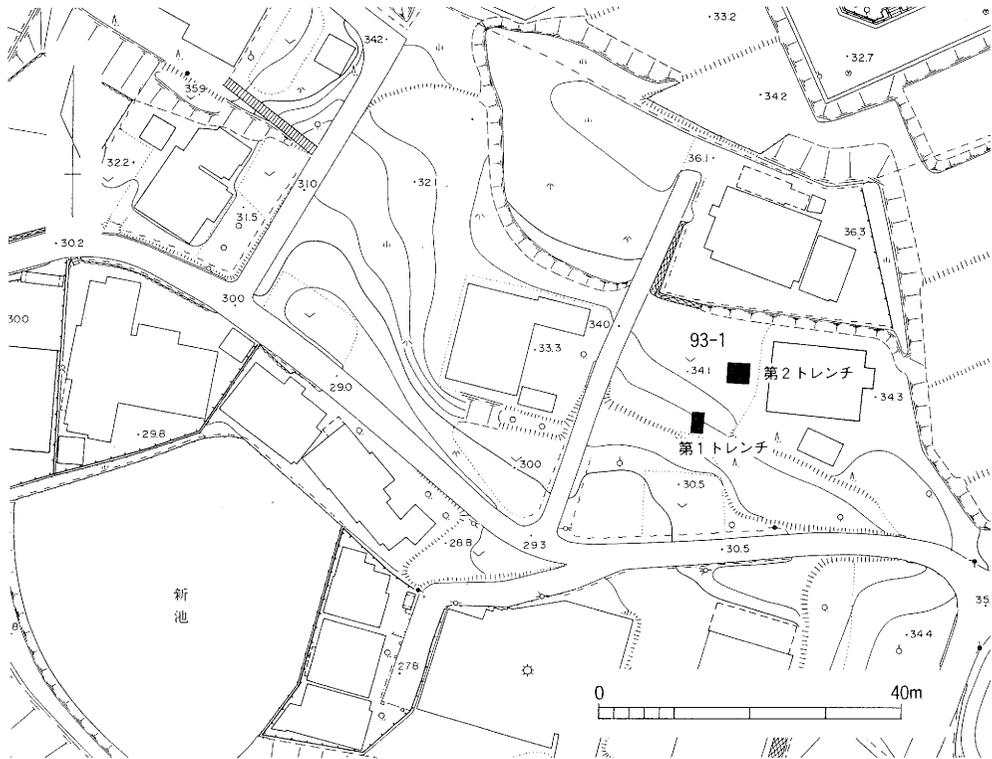
## 第2節 93-1区の調査

### 1. 位置 (第19・20図)

調査区は、樫井丘陵西側斜面のほぼ上りきった部分に位置する。標高は33～34mを測り、周辺との比高差は約20mほどである。調査区からは現在は大阪湾方面は見渡すことができない。トレンチは2カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 5・19)

第1トレンチは、やや斜面の下の部分に設定した。木や草の根などにより攪乱を受けていた表土を約40cm除去すると、すぐに地山である黄褐色シルト層が検出される。またこの地山もかなりの攪乱を受け、かなりもろくなっている部



第20図 新家オドリ山遺跡93-1区地形図

分もある。地山上面において、かなりの削平を受けているとはいえ溝状の遺構を検出している。遺物は表土中より敲石として使用されていたと思われる河原石が1点出土している。また使用されていない河原石も数点出土している。第2トレンチは、第1トレンチのやや上、宅地として平坦にされている部分に設定した。約40cmほどの表土層を除去すると、すぐに地山である黄灰色のシルト層が露呈した。かなりの削平を受けているようで遺構・遺物はまったく確認することができなかった。

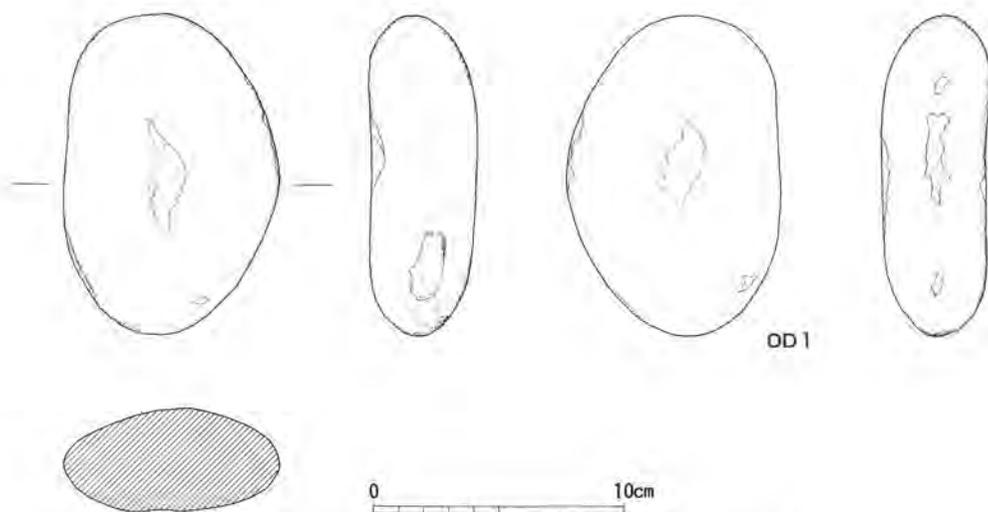
### 3. 遺構（P.L. 5・19）

第1トレンチにおいて東西方向へ向かって走る溝状の遺構を検出した。トレンチ西壁部分から始まり、やや北東方向に曲がりながら東壁部分に近づくと、ラップ状に大きく開く。しかし下端は北東方向に曲がり、南側の開く部分は別遺構の可能性はある。ちょうど、丘陵の上に向かって溝が回り込んでいくよう

な状況である。幅は西壁で約70cm、東壁で約160cm、深さ5～10cm程でかなり削平されている様である。断面は、緩やかな凹面形を呈している。埋土は、暗褐色シルトと灰色シルトの2層が確認でき、東側で開く部分の埋土は暗灰色シルトを呈する。遺物は古墳時代後期と考えられる須恵器の甕の体部が1点出土している。遺構の性格については、排水などの溝とは考えられず、不明といわざるを得ない。

#### 4. 遺物（P L. 28、第21・22図）

1は、敲石である。材質は砂岩である。ややいびつな扁平の楕円形を呈し、断面は楕円形を呈する。四面にそれぞれ敲打痕を持つ。最大長12.8cm、最大径7.4cm、最大厚4.1cm、重量660gを測る。第1トレンチの表土から出土しており、丘陵上の弥生集落で使用されていたものであろうか。



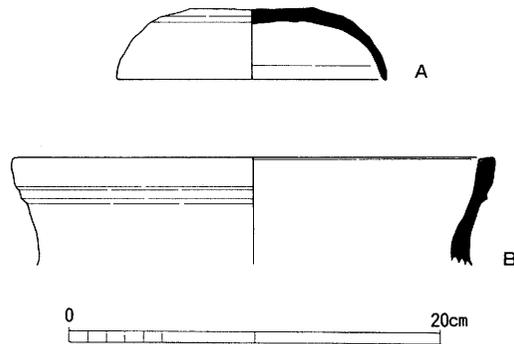
第21図 新家オドリ山遺跡93-1区出土の石器

なお、今回、遺構から出土した須恵器は図示し得なかったが、今回の発掘届出の申請者であり、施主の大森るり氏が採集した須恵器を寄贈して頂くこととなった。これらはかつて庭の造成を行った時に第1トレンチより下方約3m付近でまとまって出土したということである。破片数にすると約30点を数え、遺

構出土の土器とほとんど同時期と考えられる。器形は、ほとんどが甕または壺の体部であるが1点だけ杯蓋があった。このうち、図示したものはAとBである。

Aは、杯蓋である。天井部と口縁部までは緩やかにつながりほとんど稜を持たない。ヘラケズリを施している範囲は狭いが、シャープである。焼成は良好で、白色粒を少量含む。灰色を呈し、復元口径は14.4cmを測る。

Bは、甕の口縁部であろう。「ハ」の字に開き、口縁端部手前で一段の段が付き、まっすぐ上がる。端部は平坦に仕上げられている。焼成は良好で、オリーブ黒色を呈する。また、内外面ともに灰をかぶっている。復元口径は25.6cmを測る。いずれも6世紀代後半のものであり、下村2号墳が付近に存在することを考え合わせると、調査区に非常に近い場所に古墳があった可能性が高い。



第22図 新家オドリ山遺跡93-1区内採集遺物

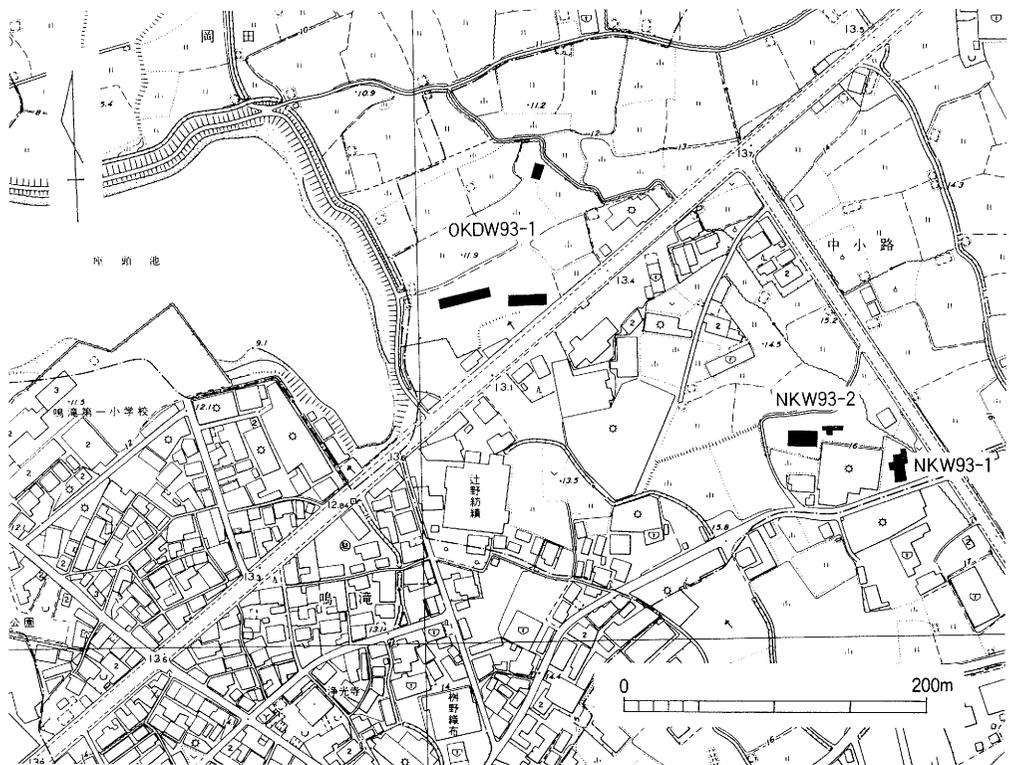
- 註 ① 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』（1986）  
② ①と同じ。  
③ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）

## 第8章 中小路西遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第23図）

遺跡名は、読み方がやや難解で「中小路」と書いて「なこうじ」と読む。泉南市域は、難解な読み方の地名が多いと言われているが、これもその一つに数えられるだろう。

中小路西遺跡は、現在の鳴滝集落と中小路集落のほぼ中間の水田の中に位置する。東西360m、南北400mの規模を持ち、北側に府道泉佐野岩出線をはさんで岡田西遺跡、岡田遺跡、西側に中小路遺跡に接している。また、西側部分を市道市場岡田線が縦断している。地形的には、周辺の遺跡も含めて樫井川左岸の広大な低位段丘面上に立地すると思われる。



第23図 中小路西遺跡及び岡田西遺跡調査区位置図

数年前、分布調査によって中世から近世にかけての遺物が散布することで遺跡として周知されたが、今日までまったく調査は行われていなかった。しかし今年度は比較的大規模な調査が一度に2件も行われることとなった。

周辺の遺跡に目を転じると、先述の岡田西遺跡においては水田開発に伴う大規模な灌漑用水路、耕作に伴う鋤溝などともに中世に属する遺構が多く検出されている。そのため中小路西遺跡も、地形的な共通点を考えるとほぼ同じような性格を持った遺跡であろうと推定されていた。しかし、今年度の1区<sup>①</sup>における調査で検出した遺構・遺物は泉南市域でも稀であり、今後の檜井川左岸の中世以降の開発を知る上でさらに大きな役割を果たすこととなるだろう。また、2区についても現在整理中であるが、この調査も1区と非常に近接した位置にあることから1区との比較で、今後の研究に大きく寄与することであろう。

## 第2節 93-1区の調査

### 1. 位置（第23・24図）

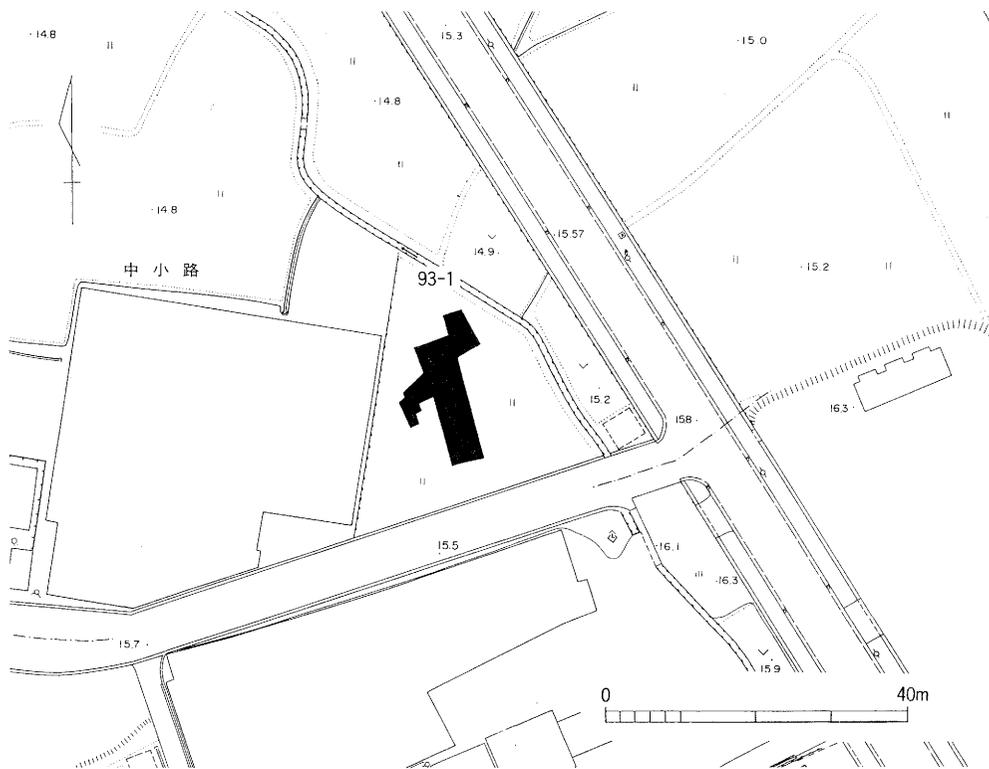
調査区は、府道泉佐野岩出線「中小路」交差点より南へ約200m、市場岡田線に面した場所に位置する。地形的には低位段丘面上に立地するものと思われる。

### 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 6・20～22）

現況は水田であるが、すでに滋味土は除去され、床土が露出していた。この床土を約10cm掘削するとすぐに黄褐色の地山であるシルト層が露呈する。部分的に灰色系の旧耕土層が残っているところもあるが、ほとんど削平されているようである。床土、旧耕土層からは遺物は出土しなかった。

### 3. 遺構（P L. 6・20～22）

トレンチ北側部分で溝（S D01）を検出したため、溝の方向に沿ってトレンチを拡張して全容解明に努めた。その結果、検出長約19m、幅は最大約3.5m、最も狭いところで約1mを測る。方向は南南西から北北東の方向へ伸び、北の方向へ行くほど幅が広がっている。断面形は、まったくと言っていいほど一



第24図 中小路西遺跡93-1区地形図

定しておらず、南側では、V字そのままの形や西側の肩が初め緩やかに落ち込み、途中からV字に近くなり東側の肩では一気に上る形をしている部分もある。北の方へ行くと両側から緩やかに落ち込みテラス状を呈した後、中央の幅約1mで凹面形に落ち込んでいる。全体に遺構の肩は不整形で崩れている可能性がある。

埋土は、下層は暗灰褐色、暗褐色系の粘性の強いシルトまたは粘土が堆積しており、それらには有機物が多く含まれている。また部分的に、水の作用による堆積と考えられる砂質の層もみられる。中層から上層にかけては、固く締まった褐色、褐灰色、灰黄褐色系のシルトで地山の黄褐色シルトをブロック状に含んでいる土層も認められ、明らかに人為的な埋め戻し土と考えてよいであろう。遺構の性格であるが、水が流れていた痕跡があり水田開発に伴う水路と考えられる。

遺物は、溝の南西拡張部分で、かなり上層から瓦器碗20数点が重なって出土

した。いずれも上を向いていたと考えられるが、検出された段階では、南の方向へ斜めに倒れた状態になっていた。斜めになっていたため、上面に飛び出た口縁部は削平されて、失われているものが多い。また上の方に重ねられた碗のいくつかもすでに失われている可能性が高い。これら瓦器碗の下からは土師器の皿数点と瓦器皿1点が出土している。これら遺物の周りには、溝とは別の掘形は確認されず、溝の埋め戻しと同時に埋め込まれたと考えてよいだろう。その他に、これら土器群以外にも瓦器や土師器などが少量出土しているがいずれも上層の埋め戻し土と考えられる土からだけで下層からはまったく出土しなかった。

S K01は、S D01の拡張部南西端に位置している。径約60cm×20cmの隅丸方形形状で、深さは約4cmを測る。埋土は褐色シルトに焼土のブロックと炭化物が大量につまって検出された。遺物は出土しなかった。

Pit 1は、S D01の拡張部南東端に位置している。径約20cmで、深さ11cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 4. 遺物 (P.L. 8・29~31)

S D01の土器群のうち、瓦器碗は完全な形に接合し得るものはまったくなかった。また、かなり焼きが悪いものや表面が剝離しているものも多く、個別別にすべての破片は分類し得なかった。そのため、何個体の碗が重ねられていたのかは不明であるが、高台の数から数えると27個体となる。今回、ヘラミガキの不明瞭なものが多いため、これによつての分類はできなかった。また整形技法などほとんど同じと言ってよい。そのため、高台の形態によつて分類を試みたところ、大きく2つに分類できた。

ひとつは断面が逆台形を呈するものである。全部で3点確認できた。これらのうち、高台径2.7~3.5cmと比較的小型のもの(1・2)と4.2cmとやや大型(3)のものの2種類が存在するようである。1・2とも、大きく開く体部で、外面は指オサエで整形している。口縁部はヨコナデを施しわずかに外反する。口径は15.6~15.8cm、器高は4.1~4.4cmを測る。1は見込み部に平行線状文が施されている。いずれも比較的焼成は良好である。3はしっかりと上方へ開く

体部で、外面は指オサエで整形している。口縁部は2段のヨコナデを施し外反させている。見込み部分の暗文は不明瞭で確認できなかった。焼成はやや不良で、全体に摩滅している。

これらに対し、大半を占めるのは、高台断面形が三角形のものである。同様に高台径が比較的小型のものとやや大型のものが存在するが、明確な分類はできない。4～8は、高台径3.4～3.8cmでやや小型といえるだろう。いずれも口縁部に向かって大きく開く体部で、指オサエで整形している。口縁部外面は1段のヨコナデを施し端部を外反させている。見込み部分に連結輪状文を施すもの(4)と、平行線状文を施すもの(8)とがある。口径は14.9～16.4cm、器高は4.2～4.8cmである。9～27は、その他の高台断面三角形の瓦器碗である。高台径は、4.0～4.8cmとかなりばらつきがある。いずれも口縁部に向かって大きく開く体部で外面は指オサエで整形している。口縁部外面は1段ナデで外反させている。同じく見込み部分に連結輪状文を施すもの(10・15・16)と、平行線状文(9)を施すものがある。口径は13.8～15.4cmで、器高は4.0～4.8cmである。

28～35は、瓦器碗の下から出土した皿である。図示し得たものは8点であるがもっと存在した可能性が高い。これらの中で28だけは瓦器皿である。全体に焼き歪みが著しい。外面底部は指オサエで整形し、口縁部はヨコナデを施す。内面は、一定方向のナデの後、輪状のヘラミガキを施している。口径は8.8cmで器高は1.8cmを測る。焼成は良好で、堅緻である。29～35は、土師質の皿である。29は、口縁部にヨコナデを施し段をつけている。底部は指頭圧痕、内面はナデを施す。底部に指頭圧痕を施すものとしては30と31がある。その他は、ナデまたは未調整である。口径は8.0～9.0cm、器高は1.2～1.6cmである。

以上、遺物の概略だけしか述べることができなかったが、瓦器碗についてまとめたい。出土状態からしてすべての遺物には時間差はないものと思われる。従来の編年<sup>②</sup>から考えると、3は、その他の瓦器碗とでは形態の上でも多少の時期差を持っていると考えられるだろう。今後の編年観の資料となることを期待する。またこれらは、高台の形、ミガキもまったく一定していないものばかりと言ってよいだろう。「和泉型」<sup>③</sup>瓦器碗は、「大和型」や「樟葉型」など

に対して撰関家や特定の権門、寺社の影響を受けず、工人にかけられた規制がゆるかったため器種・形態とも錯綜した地域性を持つ<sup>④</sup>とされるが、まさにこれらはそのことを物語っているだろう。

註 ① 泉南市教育委員会『岡田西遺跡現地説明会資料』（1992）

② 尾上実「南河内の瓦器碗」『古文化論叢』（1983）

③ 橋本久和「瓦器碗研究をめぐって」『中世土器研究序論』（1992）

④ 渋谷高秀「近畿及びその周辺地域における瓦器生産の展開」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』（1989）

## 第9章 仏性寺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P L. 1・2、第25図）

仏性寺が文献で登場するのは14世紀半ば頃にわずかにみられるだけで、寺院の実態を記した文献は現在のところ皆無である。しかし、付近の小字などからも「大門（ダイモン）」「薬師堂（ヤクシドウ）」など寺院に関係したと考えられるものが現在でも多く残っている。伝承としては、織田信長の根来攻めの際に焼失したとのことが伝わっている。また遺跡のほぼ中央に「赤井神社址」の石碑があり、これによると赤井神社は仏性寺の跡地に建立されたという内容の碑文が刻まれている。このため、仏性寺跡は泉南市内では比較的古くから遺跡として周知<sup>①</sup>されていた。

近隣の遺跡に目を向けると、同様の中世寺院として平安時代に焼失後、再建された海会寺がある。中世以降に盛んになる熊野詣と関連した厩戸王子跡も含め、この3つは非常に近接した位置にありかねてより関係が取りざたされていた。また、平安時代末から中世の間この地域は大きく開発され、集落が広がったことが確認されている。

発掘調査では、現在まで数カ所行われてきており、徐々にデータの蓄積がなされている。これまでの調査では、平安時代から室町時代にいたる複数の遺構面や包含層が確認され、中世の瓦なども多数出土している。特に昭和62年度の調査では、整地層や池の護岸状の集積遺構や配石遺構が確認<sup>②</sup>され、実態解明に大きなデータが得られている。また昨年度平成4年度の調査においては整地層とピットが確認<sup>③</sup>されている。

現在のところは、仏性寺が存在していた時代の人々の生活の痕跡は確認できるものの直接寺院にかかわった遺構は確認できていない。今後これらわずかなデータを根気よくつき合わせることで、仏性寺だけでなく泉南市内でいまだ不明な部分が多い中世寺院の実態解明につながって行くことであろう。



色礫混じりシルト層に至る。この層はかなり粘性の強いシルト層に砂岩の角礫、マンガンなどが大量に混入している。地山とは考えられず整地をした層のようにもみられる。この層を約10cm程掘り抜くと地山と思われる褐色の礫層となる。

礫層は非常に不安定でもろく、多量の湧水がある。このため地山上面では、遺構の存在の可能性が少ないため暗褐色礫層の上面で遺構検出を行ったが遺構は確認されなかった。また遺物は出土しなかった。

第2トレンチでは、第1トレンチ同様上層の盛土や新しい整地状の土層を約60cm除去すると、数層の旧耕土層が約60cm程確認された。これらの下層には第1トレンチの8層に相当すると思われる褐灰色シルトや暗黄灰色シルトが約40cmにわたって認められ、第1トレンチ9層に相当する暗褐色の礫を多く含んだシルト層に至る。遺構検出は、暗褐色礫混じりシルト層で行ったが遺構は確認できなかった。なお、第1トレンチ同様、この暗褐色シルト層を約20cmほど掘削すると暗灰色の砂礫層があらわれ湧水が始まる。遺物は、上層から旧耕土へ切り込む攪乱から瓦が少量出土したが、いずれも近代以降のもので仏性寺に関連したと考えられるものは含まれていなかった。そのほかの層からは遺物は出土しなかった。

第3トレンチは、第2トレンチ8層の褐色シルトが欠落しているものの第2トレンチと基本的に同じであるといつてよいであろう。遺構・遺物は確認することができなかった。

ここで、この調査区の西側に隣接した、平成4年度の調査(92-1区)との比較とまとめを行いたい。92-1区で遺構を検出した面は、整地土であると報告されており、今回遺構検出を行った暗褐色礫混じりシルト層と非常に共通点が多いことがわかる。また、その遺構面の標高はT.P.+8m付近であるが、今回の調査ではT.P.+8.6~8.9mを測る。今後の調査でこの層の拡がりと高さが注目される。

今回検出された旧耕土層については、遺物は出土しなかったものの、時期的には中世と考えられる。中世から近世を通して基本的に水田として利用されていたことから、寺の伽藍は当地区までは及んでいなかったと考えられる。

- 註 ① 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』（1986）
- ② 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』（1985）
- ③ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』（1993）
- ④ ③と同じ。

## 第10章 岡田遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2）

岡田遺跡は、泉南市域では男里遺跡に次ぐ第2番目の面積を持つ巨大な遺跡である。遺跡の現状は大半は水田で、北東部の一部が現在の岡田集落にかかっている。地形的にはすべて榎井川左岸に広がる広大な低位段丘面上に立地すると考えられる。発見から今日まで数年経過し、かなりの件数の調査が行われて来ているが、大半が個人住宅等を対象とした小規模なトレンチのためなかなか遺跡の全貌を把握するには至っていない。

現在までの成果を大まかにまとめてみたい。最も古い遺物としては縄文または弥生時代のサヌカイト製の石鏃が1点みつまっている。遺物の該当する時期の層から出土していないものの二次的な移動をさほど受けていないとされてい



第26図 岡田遺跡調査区位置図

る。また、奈良・平安時代の須恵器片なども少量出土しており<sup>②</sup>、小規模ながらも遺跡が展開していたことがうかがえる。

しかし、最もよく確認されている遺物は中世以降のものである。遺物包含層もほとんどが中世のものと見られる。また、現況が水田の調査においては必ずと言って良いほど旧耕土層が遺物包含層となっている。この旧耕土層は通常2～3層以上確認できかなり濃厚な部分もある。中世以降、延々と水田として使用されていたことが理解できる。遺構は、鋤溝などの水田に伴うものが多いが、遺跡のほぼ中央部で、旧耕土の下から柱穴と見られるピットも見つかり<sup>③</sup>、耕地化される以前は、当時の村落の形態も考慮しなければならないが限定的な地域で集落が存在したと考えられる。

一方、岡田集落の内部においてはほとんど調査の例がないが、91年度の調査では、まったく旧耕土が認められず、近代・近世の盛土が確認され、中世末から近世初頭にかけての瓦を出土する土坑などが見つかり<sup>④</sup>ている。

以上のように現段階では、岡田遺跡は、中世を中心とした集落遺跡という推定が最も妥当であろう。集落の成立と現在の水田の耕地化の時期、現在の岡田集落へのつながりなど今後周辺の遺跡の調査を含めて検討する課題が多い。

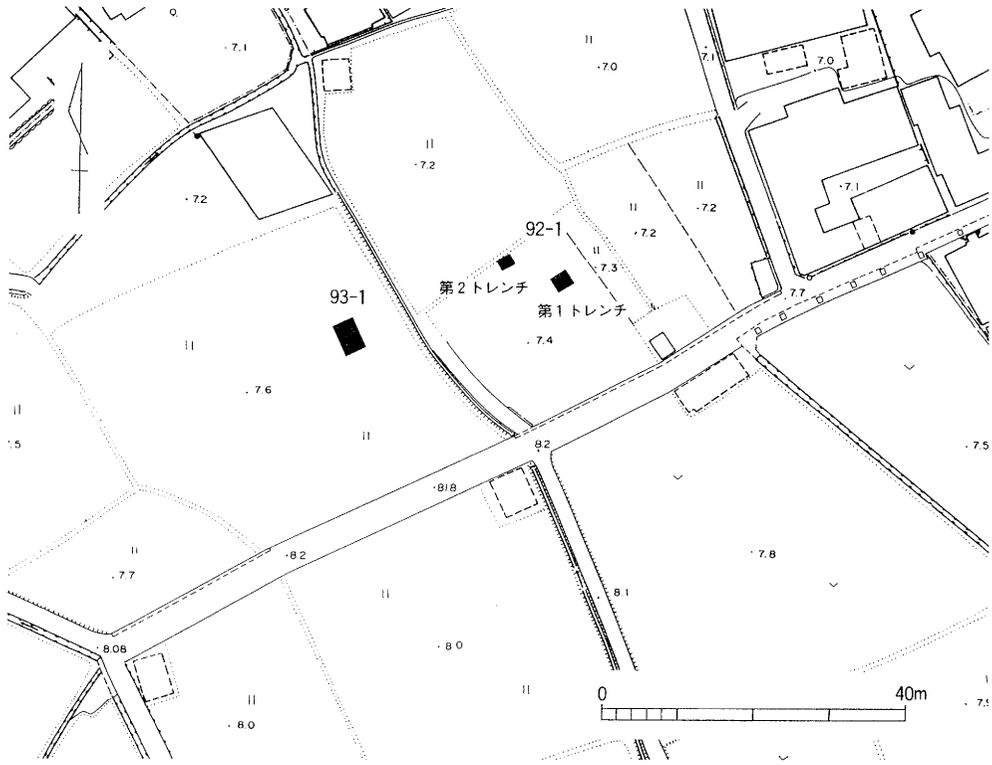
## 第2節 93-1区の調査

### 1. 位置 (第26・27図)

93-1区は92-1区の南西約20mの近距離に位置する。地形分類上では洪積段丘低位面に立地することになる。調査区のすぐ西側に隣接する地点では90年の調査において、ピット、土坑等が2面の遺構面にわたって確認されており、遺構が比較的密集する地点にあたると思われる。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 7・24)

基本的な層序は、第I層・盛土(約90cm)、第II層・旧耕土(約20cm)、第III層・旧床土(約10cm)、第IV層・灰色砂質土(約20cm)、第V層・褐色混じり灰色砂質土(約20cm)、第VI層・黄褐色砂質土(約10cm)、第VII層・マンガン混じ



第27図 岡田遺跡93-1・92-1区地形図

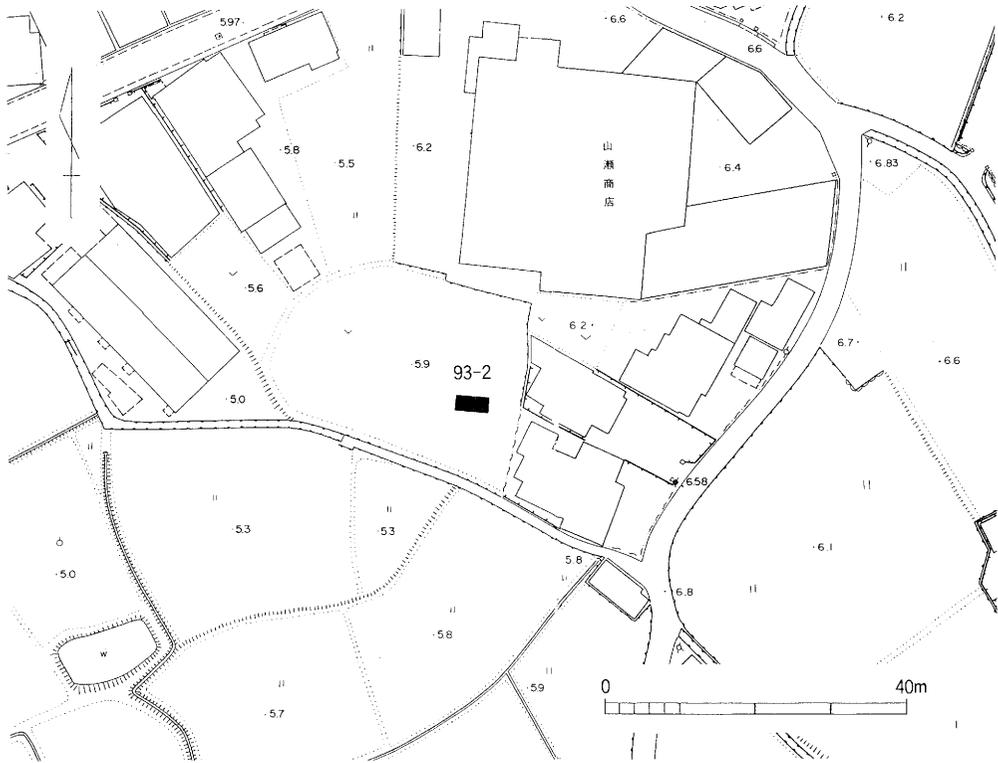
り褐灰色土（約20cm）がほぼ水平に堆積する。地山は淡黄灰色粘土で、北方向に10cm程度の比較差をもって傾斜している。また、第Ⅲ層以下はいずれも砂質系の堆積土であり、非常に軟弱で且つ若干の湧水を伴う。

地山上面において精査を行ったが遺構は検出されなかった。遺物は第Ⅳ層から土師器片が2点出土したがいずれも細片のため図化し得ない。

### 第3節 93-2区の調査

#### 1. 位置（第26・28図）

調査区は、岡田遺跡の北端部分、現在の岡田集落の西のはずれに位置する。地形的には、低段丘面の海へ向かって落ちる先端部分に立地するものと考えられる。



第28図 岡田遺跡93-2区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 7・25)

約40cmの盛土を除去すると、褐灰色のシルトがみられる。砂質を呈し、厚さ約20cmほどである。土質からみると岡田遺跡で最もよくみられる旧耕土層であるが全体に濁った色で、褐色系の土をブロック状に含む部分もあるため、比較的近年に攪乱を受けている可能性が高い。この層の下層に地山である黄白色の粘性土が存在する。

遺物は、褐灰色シルト層より中世の所産である須恵器が少量出土しているがいずれも細片である。

## 3. 遺構 (P L. 7・25)

遺構はピット1個を検出した。直径10cm、深さ10cmで、埋土は灰色のシルトである。遺構の性格については、柱穴というよりはむしろ水田に伴う杭の穴と考えた方が良いであろう。遺物は出土しなかった。

## 第4節 92-1区の調査

### 1. 位置 (第26・27図)

92-1区は遺跡の中央部よりやや北側に位置している。地形分類上は洪積段丘低位面に立地している。当調査区の周辺では、これまで調査例が少なかったが、ここ数年の間に調査区南西側60mの範囲内において3回の調査が実施されており、遺構及び弥生～中世にわたる遺物が検出されるなど、いままで不透明な部分が多かった当遺跡の内容究明に欠くことのできない多くのデータを獲得している。今回の調査においても新たな資料の追加が期待された。

トレンチは2カ所を設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 7・26)

第1、2トレンチの層序は共通しており、各層はすべて水平堆積している。計7層が確認できた。第I層は現耕土(約20cm)、第II層・床土(約10cm)、第III層は旧耕土に相当する黄褐色混じり灰色土(約10cm)、第IV層・灰色砂質土(約15cm)、第V層はマンガン混じり灰黄色砂質土(約20cm)、第VI層・マンガン混じり黄褐色土(約20cm)、第VII層は地山にあたる黄白色粘土である。第1、2トレンチともに遺構は検出できなかった。また、遺物は第1トレンチの第IV層より土師器片、第2トレンチの第IV層からも同じく土師器片が出土したがいずれも細片で図化できなかった。

註 ① 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)

② ①と同じ。

③ ①と同じ。

④ ①と同じ。

## 第11章 まとめ

今年度の、文化財保護法に基づく埋蔵文化財包蔵地内における発掘届出および通知は、平成6年2月28日現在で、第1表に示したとおり49件を数える。

今年度においては、一昨年以来のバブルの崩壊以後の「平成不況」と呼ばれる長期経済停滞期の到来、連立与党による新政権発足など、社会には大きな変動がおこることとなった。そのためか、今年度も、発掘届出・通知件数の増加は落ち着く様子を見せたといえるであろう。

しかし、このような経済状況においても発掘届出・通知の件数が、昨年度並みの件数が維持されているということは、今後、景気刺激策等による様々な公共投資の増加に加えて、平成6年9月4日に開港する関西国際空港とその関連事業の大規模開発を控えている本市においては、今年度の件数傾向のみで今後の状況を判断できるはずもなく、むしろ今後急増していく気配を感じざるを得ない。

こうした周囲の状況のもと、今年度も市内各遺跡群において合計13件の発掘調査を行いその内容究明に努めた。その内訳は、第2表に示したとおり男里遺跡6件、光平寺跡1件、幡代遺跡1件、岡中遺跡2件、海宮宮池遺跡1件、新家オドリ山遺跡1件、岡田遺跡1件である。いずれにおいての調査も個人住宅建設等に伴うものであり、調査面積から比較しても、いわゆる大規模開発に伴うものとは比べものにならない。しかしながら、ここから得られた情報は非常に大きなものであることは、あらためていうまでもない。

なお、本書では前年度調査未報告分の男里遺跡1件(92-10区)、幡代遺跡1件(92-3区)、岡田遺跡1件(92-1区)についても報告することができた。これらの成果も含め、以下に調査の成果を遺跡別に順次まとめていきたい。

男里遺跡では、今年度6件の調査がおこなわれた。各調査区ではそれぞれ大きな成果をあげることができた。

93-1区においては、これまで近辺の調査の多くでは砂礫層の面が検出されているにもかかわらず、安定したシルトまたは粘質土の遺構面が確認できた。また、検出された柱の掘方は比較的大きなもので隅丸方形を呈するというこ

は、かなりの大規模な建物が想定できる。近年、古墳時代後期の遺構・遺物の検出が相次いでいるが当該期の集落の具体的な資料が確認できたといっていだらう。

93-2区は、遺構は確認できなかったものの、古墳時代後期から中世にいたる遺物の確認は、男里遺跡の時代の幅広さを物語ることとなった。また耕土層の下層に存在する暗褐色シルト層は、遺構の存在に期待がもたれ、その拡がり注目される。

93-3区は、かつての男里川の旧流路が双子池付近にあるといわれるがこの考えを補強したといえよう。93-4区は、遺跡の北東部から東部、馬場極楽寺丘陵の手前までの沖積段丘上に広く認められていた黒褐色系の土層が今回もみられた。同様に93-5区、92-10区においても黒褐色系の土層が確認されている。土層の厚さは、93-5区、92-10区では約40cmで、93-4区は薄く10cmほどであるが、いずれも同系列の土層である。また92-10区は、最も西側に位置する検出の例となるものであろう。今後、さらなる層の拡がりを追求して行かなければならない。

一方、93-4区で検出した遺構は、昨年度新規に発見され報告された男里東遺跡や、同じく昨年度報告の男里遺跡92-6区検出の不整形土坑<sup>①</sup>と埋土や形態の点で非常に共通するものがある。しかもそれらは上層に黒褐色系土層を伴っているということが注目される。果たして、これが人為的に掘削されたものか否かは今後の資料の増加を待ちたい。

93-6区は、男里川の自然堤防上の砂礫の堆積状況を明確にしたほか、大正時代と特定できる旧耕土層も確認することができ、近代以降の男里遺跡の水田開発も明らかになった。

光平寺跡では、1件の調査が行われた。今回検出した遺構・遺物の時期は、直接中世寺院・光平寺の実態解明に結びつくものではなかった。しかし、これまでほとんど例を見ない光平寺跡の調査に大きな第一歩を踏み出したことになるだろう。

幡代遺跡においては、毎年数件ずつ着実に調査が行われ、今年度も同様に大きな成果を得ている。93-1区・93-2区は、遺構は検出することはできなかつ

たが、金熊寺川の氾濫原の確認と集落内にみられる湧水池との関係を知る上でも貴重なデータとなるであろう。

92-3区は、現在宅地となっている部分で耕作痕が検出されている。これは、現在の幡代集落の拡がり、その起源解明に大きな成果があったといえるだろう。幡代遺跡は今後、ほぼ中央を府道金熊寺男里線によって分断される形となり府道完成後は、その周辺の開発が急増することは明らかである。今後とも慎重な調査が必要となろう。

岡中遺跡は、今年度は久々の調査となった。93-1区は、遺跡のかなり北方に当たるが、遺構を確認し、遺跡ほぼ全域で遺構の存在が明らかになった。93-2区は、かつて検出された土坑墓群の地区とはまったく異なる結果を示し、土坑墓群の範囲を特定するのに大きな成果があった。

海宮宮池遺跡は、本格的な調査の例がほとんどなくかねてより知られていた遺跡でありながら不明な部分が多かった。今回は遺構の検出をみなかったが、今後の資料の蓄積がされるにつれて、丘陵の自然地形の解明に大きな役割を果たすだろう。

新家オドリ山遺跡は、かつての宅地造成に伴う調査以降発掘調査はまったく行われていなかった。今回は破壊を逃れた西側丘陵斜面部に初めて調査のメスが入ったことになるが、ほとんど予想しなかった古墳時代後期の遺構・遺物を検出することとなった。遺構の性格は不明といわざるを得ないが、下村2号墳以外に古墳の存在の可能性を想定できる非常に興味深い結果となった。

泉南市内で近年最も遺跡の発見が相ついでいるのは、市の中央、北東部分に位置する榎井川左岸の低位段丘面上である。これまで水田が多く大規模な開発行為もさほど行われていなかった。しかし、この数年の間に幸か不幸か、大規模開発の引き替えに、一挙にその全容が明らかになろうとしている。これよりまとめる遺跡群は、この段丘面上に立地する点で共通するものである。

中小路西遺跡からは、中世の水田開発に伴う大規模な灌漑用水路が検出された。これは、掘削し使用後、必要がなくなるとみえて意図的に埋め戻し、その部分も耕地として再利用している。このような例は、同じく段丘面上に立地する岡田西遺跡<sup>②</sup>においても見つかっている。中世に、これまで手つかずであっ

たこの段丘面に大規模な水路を掘削し、水を引き入れ開発を行った当時の土木工事の様子を、ありありと浮かび上がらせることができる結果となった。また一括で出土した瓦器碗は、この水路の埋没年代はもとより、泉南地域の瓦器碗研究の大きな資料となろう。

仏性寺跡においては、今回も寺の伽藍等寺院に関係する遺構は確認することはできなかったが、不安定な礫層の地山に整地を施した面が確認され、現在の水田になる前に、明らかに人の手が加わったことを示す重要な発見であろう。

岡田遺跡も、小規模ながら毎年数件ずつの調査が行われ着実にデータの蓄積がなされている。93-1区では、遺構は検出できなかったものの、旧耕土層と思われるふ厚い包含層が確認された。93-2区では岡田遺跡では最も北方の遺構発見となった。92-1区は第1、第2トレンチとも遺跡内で最も一般的な層序が確認され、かなり厚い旧耕土層に覆われているというデータの補強となった。

以上各遺跡ごとに簡単なまとめを行ったが、時間的な制約と力量不足もありほとんどが、事実報告のみに終始せざるを得なかった。当然のごとく今回の調査だけでは、市域の遺跡の全貌を解明できたとは言えず、それぞれの成果からより発展的な論の展開と追究は今後、更なるデータの蓄積がなされなければならないだろう。同時に、発掘調査によって遺跡が与えてくれる情報をでき得るかぎり処理できる能力を常に研鑽して行かなければならないのも我々の責務であると心に念じつつ今回の報告の終わりとしたい。

註 ① 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）

② 泉南市教育委員会『岡田西遺跡現地説明会資料』（1992）

第5表 文化財一覧表

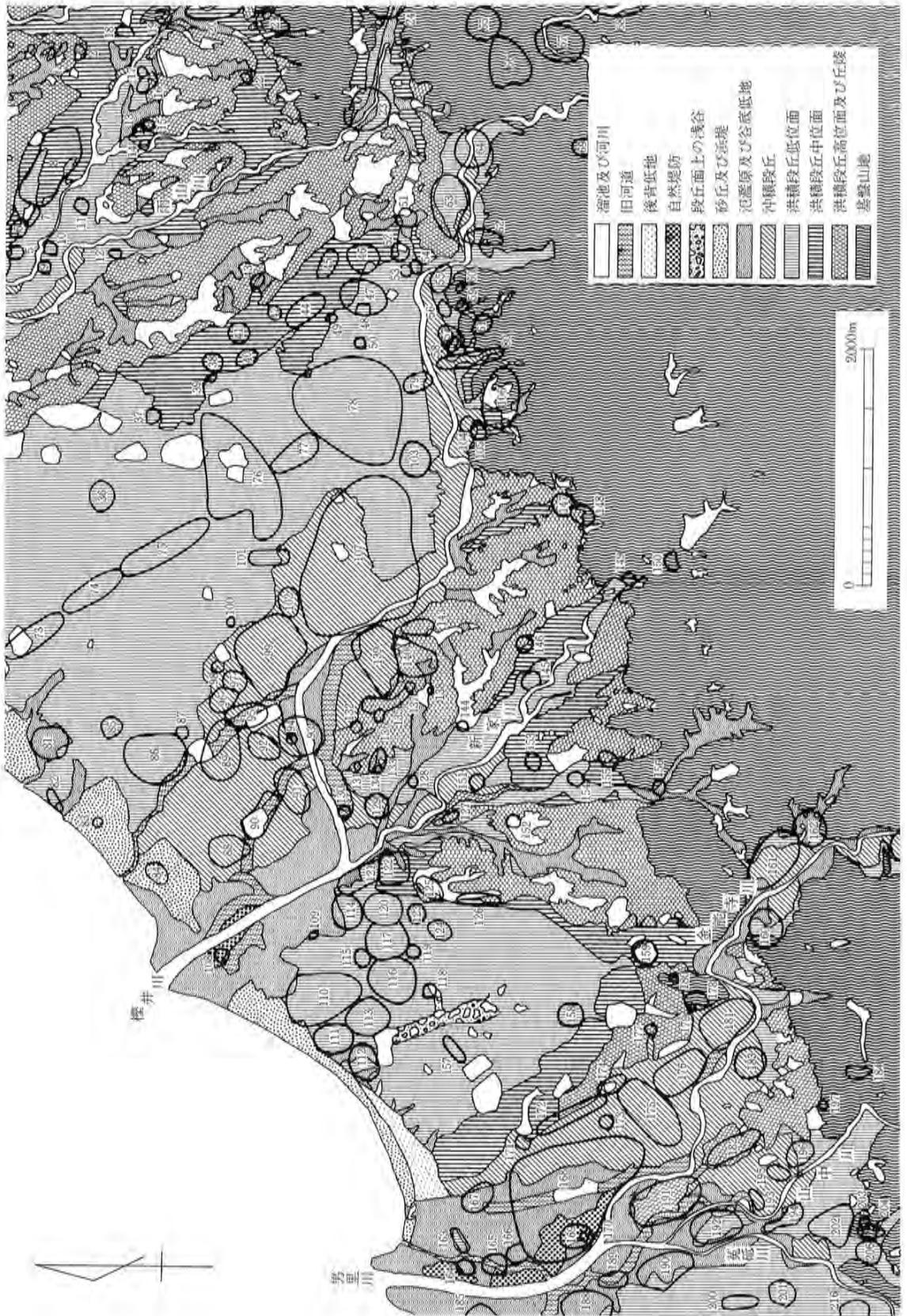
1	正法寺跡	46	北ノ前遺跡	91	櫻井西遺跡	136	新家オドリ山南遺跡	181	岡中遺跡
2	小垣内遺跡	47	野々宮遺跡	92	藤波遺跡	137	フキアゲ山西遺跡	182	高田山古墳群
3	大谷池遺跡	48	総福寺天満宮本殿	93	櫻井城跡	138	引谷池窯跡	183	岡中西遺跡
4	大久保B遺跡	49	宮ノ前遺跡	94	奥家住宅	139	兎田遺跡	184	雨山南遺跡
5	下高田遺跡	50	垣外遺跡	95	道ノ池遺跡	140	フキアゲ山東遺跡	185	福島遺跡
6	紺屋遺跡	51	屯田遺跡	96	岡ノ崎遺跡	141	フキアゲ山1号墳	186	尾崎海岸遺跡
7	口無池遺跡	52	八王子遺跡	97	中菖蒲遺跡	142	フキアゲ山2号墳	187	馬川北遺跡
8	東門寺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	98	岸ノ下遺跡	143	兎田古墳群	188	馬川遺跡
9	降井家屋敷跡	54	日根神社遺跡	99	諸目遺跡	144	池尻遺跡	189	下出北遺跡
10	大久保C遺跡	55	西ノ上遺跡	100	城ノ塚古墳	145	中の川遺跡	190	室堂遺跡
11	中家住宅	56	川原遺跡	101	禪興寺跡	146	岩の前遺跡	191	平野寺(長楽寺)跡
12	大久保A遺跡	57	母山遺跡	102	ダイジョウ寺跡	147	別所北遺跡	192	向出遺跡
13	五門北古墳	58	母山近世墓地	103	上之郷遺跡	148	別所遺跡	193	高田西遺跡
14	五門遺跡	59	向井山遺跡	104	向井代遺跡	149	高野遺跡	194	向山遺跡
15	五門古墳	60	鏡塚古墳	105	意賀美神社本殿	150	昭和池遺跡	195	高田南遺跡
16	大浦中世墓地	61	梨谷遺跡	106	向井池遺跡	151	上村遺跡	196	和泉鳥取遺跡
17	大浦遺跡	62	笹ノ山遺跡	107	三軒屋遺跡	152	狐池遺跡	197	雨山遺跡
18	甲田家住宅	63	土丸遺跡	108	川原遺跡	153	上野中道遺跡	198	内畑遺跡
19	久保B遺跡	64	土丸南遺跡	109	岡田東遺跡	154	芋掘遺跡	199	皿田池古墳
20	鳥羽殿城跡	65	雨山城跡	110	岡田遺跡	155	石ヶ原遺跡	200	正方寺遺跡
21	墓の谷遺跡	66	土丸城跡	111	氏の松遺跡	156	高倉山南遺跡	201	西畑遺跡
22	来迎寺本堂	67	下大木遺跡	112	座頭池遺跡	157	本田池遺跡	202	自然田遺跡
23	池ノ谷遺跡	68	大木遺跡	113	岡田西遺跡	158	上代石塚遺跡	203	玉田山遺跡
24	成合寺遺跡	69	稲倉池北方遺跡	114	新伝寺遺跡	159	信之池遺跡	204	玉田山古墳群
25	山ノ下城跡	70	大西遺跡	115	中小路北遺跡	160	滑瀬遺跡	205	玉田山須恵器窯跡
26	山出遺跡	71	松原遺跡	116	中小路西遺跡	161	六尾遺跡	206	寺田山遺跡
27	上瓦屋遺跡	72	中間遺跡	117	中小路遺跡	162	六尾南遺跡	207	黒田西遺跡
28	湊遺跡	73	末廣遺跡	118	坊主池遺跡	163	天神ノ森遺跡	208	鳥取北遺跡
29	壇波羅密寺跡	74	安松遺跡	119	中小路南遺跡	164	キレト遺跡	209	鳥取遺跡
30	壇波羅遺跡	75	長滝遺跡	120	北野遺跡	165	高田遺跡	210	鳥取南遺跡
31	佐野王子跡	76	植田池遺跡	121	一岡神社遺跡	166	男里北遺跡	211	黒田南遺跡
32	上町東遺跡	77	郷ノ芝遺跡	122	海会寺跡	167	戎畑遺跡	212	神光寺(蓮池)遺跡
33	市場東遺跡	78	日根野遺跡	123	大苗代遺跡	168	男里遺跡	213	三味谷遺跡
34	若宮遺跡	79	机場遺跡	124	仏性寺跡	169	光平寺跡	214	三升五合山遺跡
35	上町遺跡	80	棚原遺跡	125	海營宮池遺跡	170	光平寺石造五輪塔	215	小口谷遺跡
36	依屋遺跡	81	羽倉崎東遺跡	126	市場遺跡	171	男里東遺跡	216	井関遺跡
37	北尻遺跡	82	羽倉崎遺跡	127	向井山遺跡	172	長山遺跡	217	石田山遺跡
38	岡口遺跡	83	嘉祥神社本殿	128	新家遺跡	173	山ノ宮遺跡	218	西鳥取遺跡
39	中嶋遺跡	84	道ノ池遺跡	129	下村遺跡	174	前田池遺跡	219	戎遺跡
40	小塚遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	130	下村北遺跡	175	幡代遺跡	220	貝掛遺跡
41	十二谷遺跡	86	船岡山遺跡	131	下村1号墳	176	幡代南遺跡	221	金剛寺遺跡
42	丁田遺跡	87	岡本庵寺	132	新家オドリ山東遺跡	177	奥ノ池遺跡	222	塚谷古墳群
43	新池尻遺跡	88	田尻遺跡	133	新家オドリ山遺跡	178	林昌寺跡		
44	大坪遺跡	89	船岡山南遺跡	134	下村2号墳	179	林昌寺瓦窯跡		
45	市堂遺跡	90	夫婦池遺跡	135	新家古墳群	180	林昌寺銅鑄出土地		

図

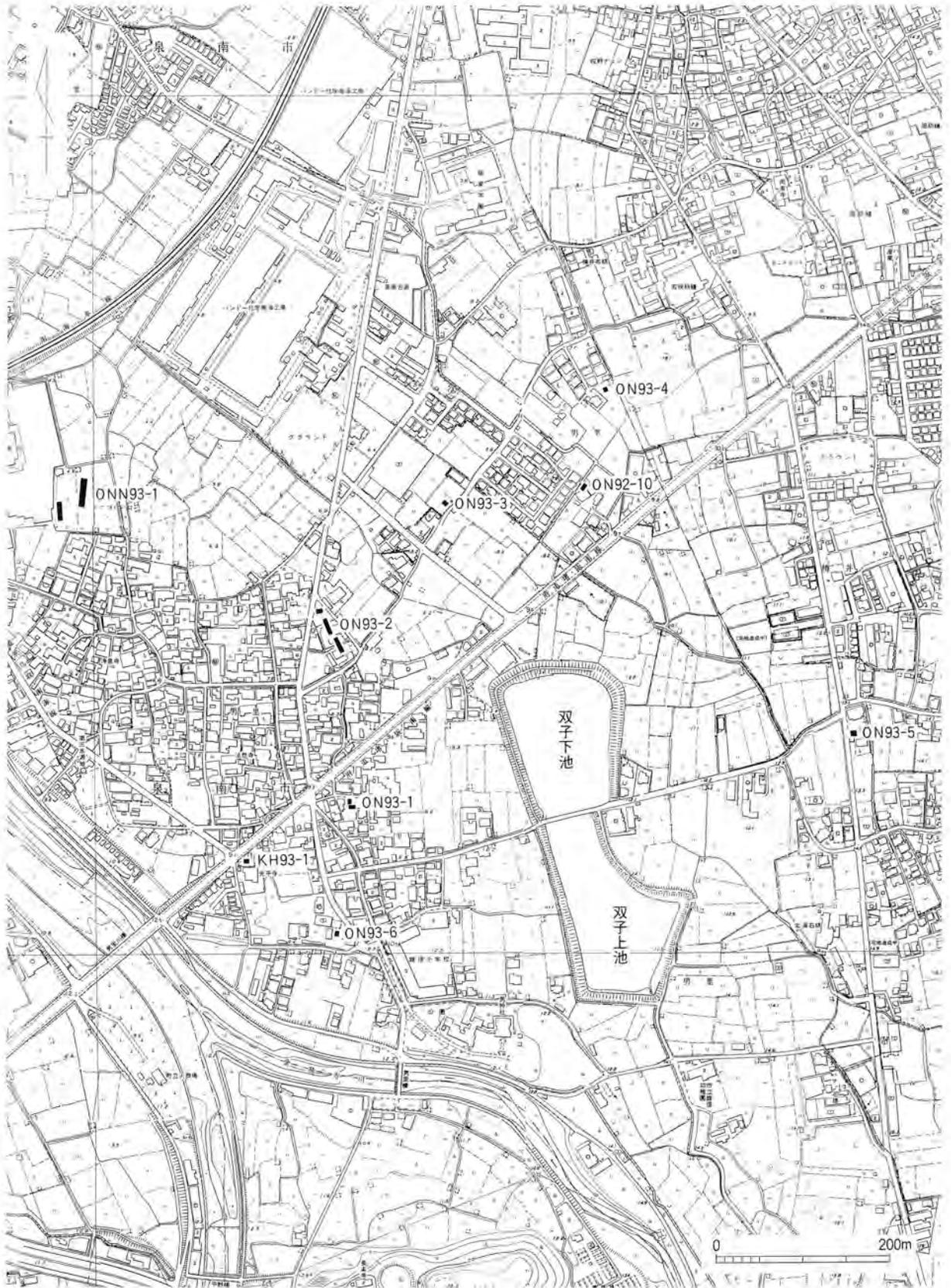
版

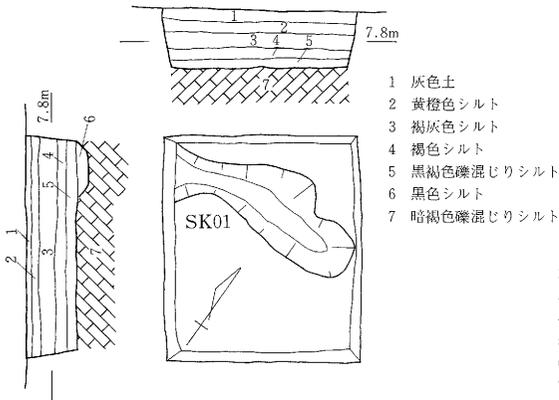


PL.2 泉南地域の地形分類



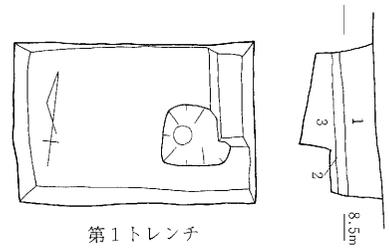
PL.3 男里遺跡・光平寺跡・男里北遺跡調査区位置図



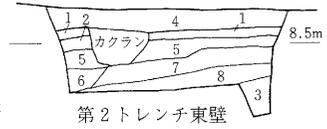


ON93-4区 平面図及び断面図

- 1 灰色土
- 2 黄橙色シルト
- 3 褐灰色シルト
- 4 褐色シルト
- 5 黒褐色礫混じりシルト
- 6 黒色シルト
- 7 暗褐色礫混じりシルト



第1トレンチ

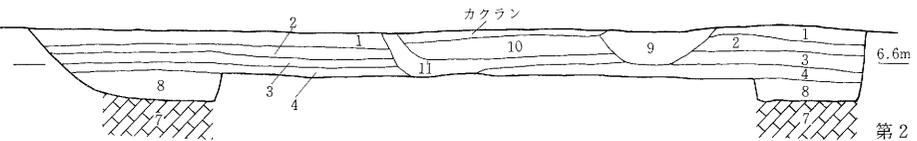


第2トレンチ東壁

- 1 暗黄褐色土
- 2 暗灰色土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗黒色土
- 5 茶褐色混じり灰色土
- 6 茶褐色土
- 7 暗茶褐色混じり灰色砂質土
- 8 暗黄褐色砂質土

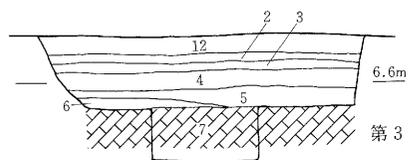


第1トレンチ西壁



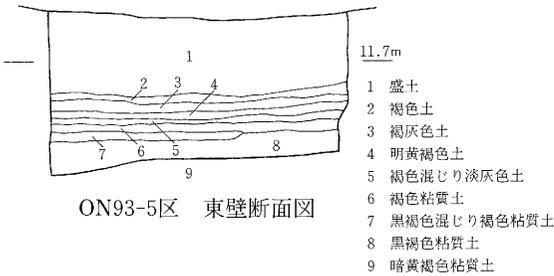
第2トレンチ西壁

- 1 赤褐色シルト
- 2 黄褐色シルト
- 3 灰褐色シルト
- 4 橙色シルト
- 5 暗褐色シルト
- 6 暗褐色シルト
- 7 灰色砂礫
- 8 青灰色粘質土
- 9 灰色粘質土
- 10 黄灰色粘質土
- 11 青灰色粘質土
- 12 灰色土(耕土)



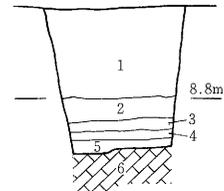
第3トレンチ北壁

ON93-2区 断面図



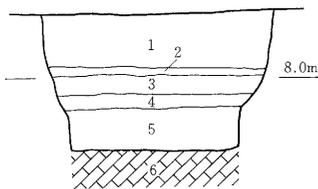
ON93-5区 東壁断面図

- 1 盛土
- 2 褐色土
- 3 褐灰色土
- 4 明黄褐色土
- 5 褐色混じり淡灰色土
- 6 褐色粘質土
- 7 黒褐色混じり褐色粘質土
- 8 黒褐色粘質土
- 9 暗黄褐色粘質土



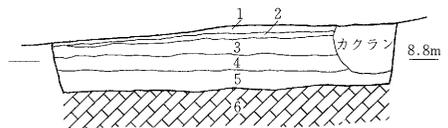
ON93-3区 北壁断面図

- 1 盛土
- 2 黒色土
- 3 灰黄色シルト
- 4 褐灰黄色シルト
- 5 暗灰褐色シルト
- 6 暗褐色砂礫



ON92-10区 西壁断面図

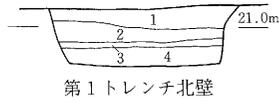
- 1 盛土
- 2 灰色土
- 3 灰黄色土
- 4 褐色土
- 5 黒褐色粘質土
- 6 暗黄褐色土



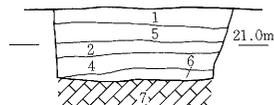
ON93-6区 西壁断面図

- 1 盛土
- 2 赤褐色土(床土)
- 3 暗灰褐色シルト
- 4 褐色シルト
- 5 灰色礫
- 6 暗黄色砂礫

PL.5 光平寺跡・幡代遺跡・岡中遺跡・海宮宮池遺跡・新家オドリ山遺跡調査区



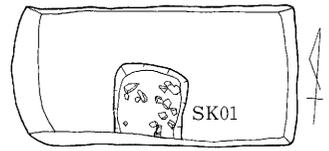
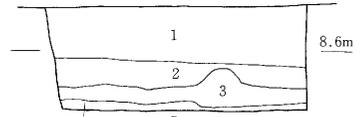
第1トレンチ北壁



第2トレンチ北壁

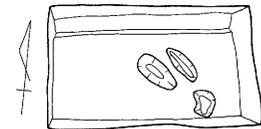
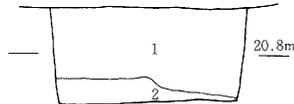
HT93-2区 断面図

- 1 褐色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 灰色混じり暗褐色土
- 4 黒褐色砂礫混じり粘質土
- 5 茶褐色土
- 6 黒褐色粘質土
- 7 暗褐色土



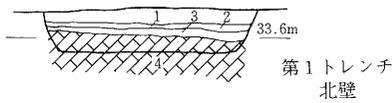
- 1 盛土
- 2 暗灰色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗茶褐色土
- 5 灰色混じり黒褐色土

KH93-1区 平面図  
及び断面図

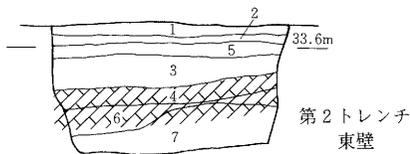


- 1 盛土
- 2 暗黄褐色土

HT92-3区 平面図  
及び北壁断面図



第1トレンチ  
北壁



第2トレンチ  
東壁

- 1 灰色土(耕土)
- 2 赤褐色シルト
- 3 黒褐色礫混じりシルト
- 4 暗褐色砂礫
- 5 暗灰黄色シルト
- 6 灰黄色粗砂
- 7 暗褐色砂礫

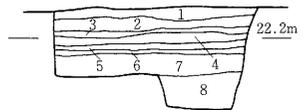
OK92-2区 断面図



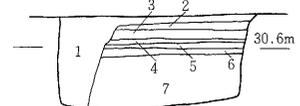
- 1 盛土
- 2 灰黄色シルト
- 3 黄灰色シルト

KG93-1区 北壁断面図

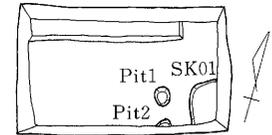
- 1 盛土
- 2 灰色土(旧耕土)
- 3 黄灰色土(旧床土)
- 4 灰黄色土
- 5 灰色混じり黄褐色土
- 6 黄褐色土
- 7 黒褐色土
- 8 クサリ礫混じり黒褐色粘質土



HT92-2区 西壁断面図

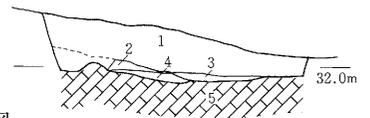


- 1 盛土
- 2 黄褐色混じり灰色土
- 3 マンガン混じり灰黄褐色土
- 4 明黄褐色土
- 5 褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 礫混じり黒褐色粘質土

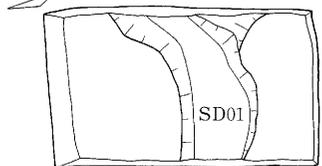


OK93-1区 平面図  
及び北壁断面図

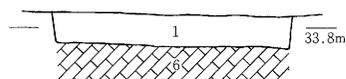
OD93-1区 平面図  
及び断面図



- 1 盛土
- 2 暗褐色シルト
- 3 暗灰色シルト
- 4 灰色シルト
- 5 黄褐色シルト
- 6 黄灰色シルト



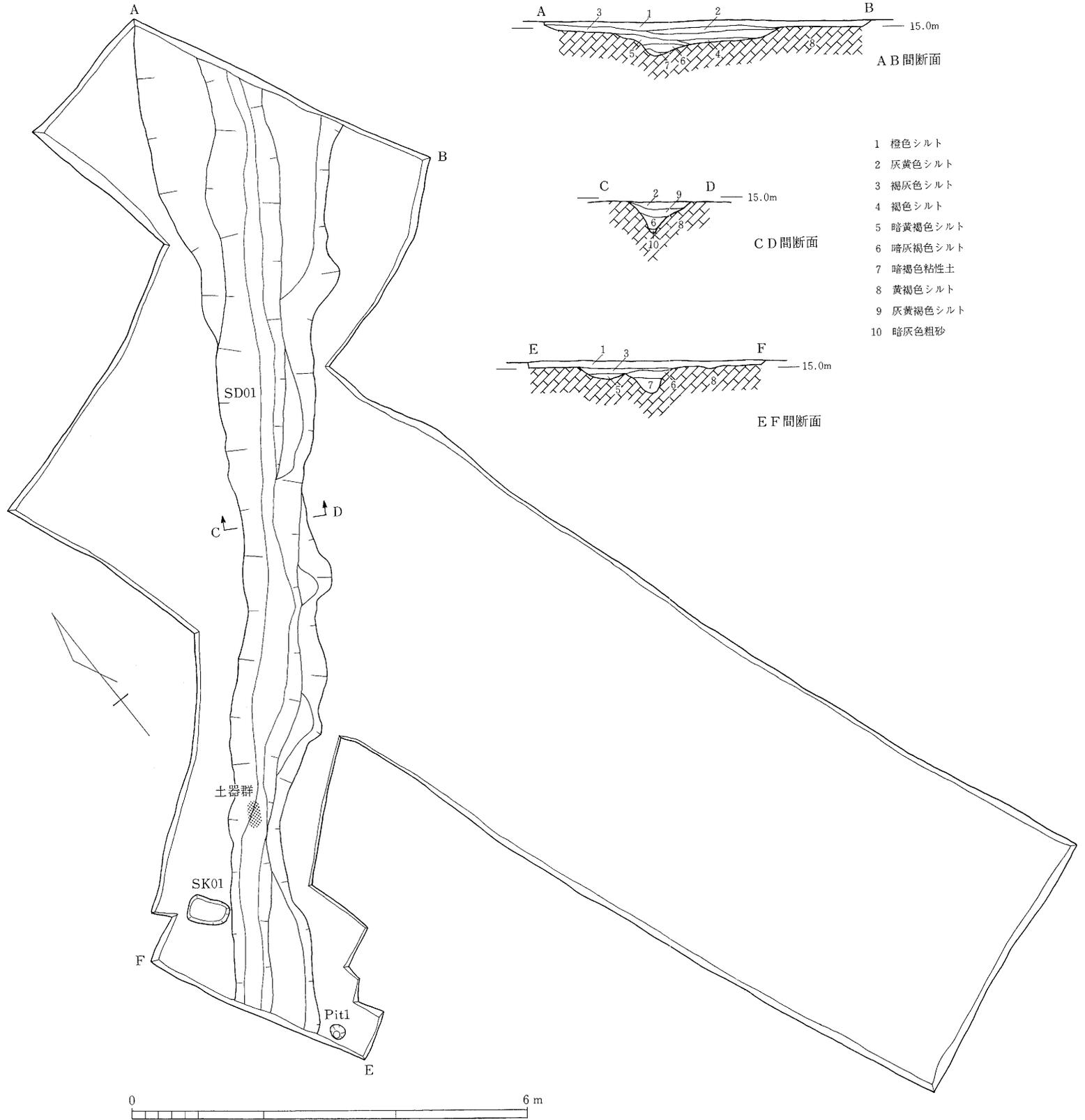
第1トレンチ

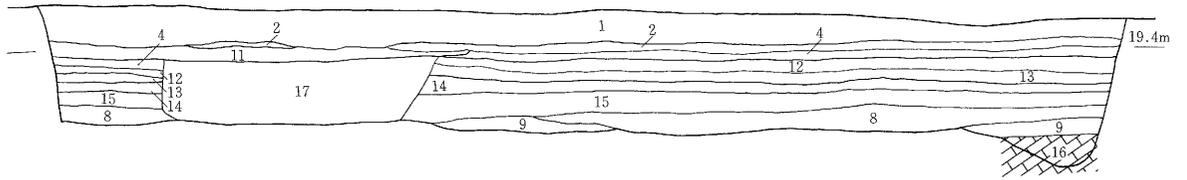
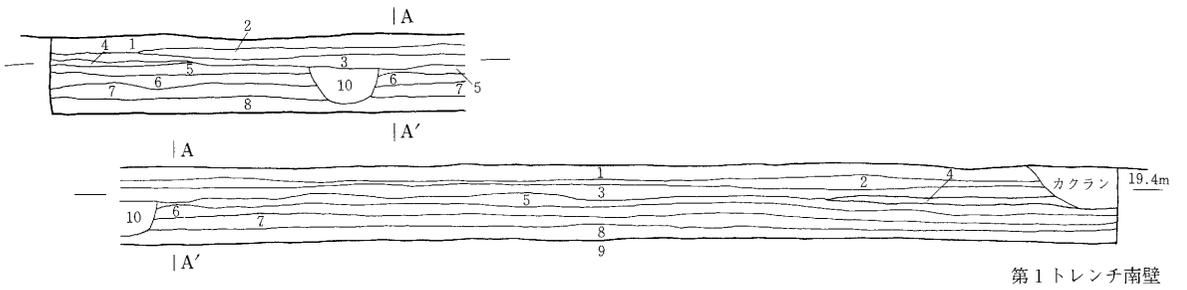


第2トレンチ南壁



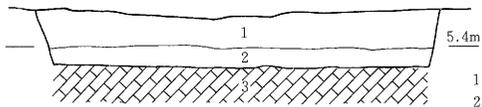
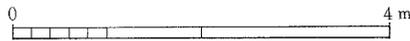
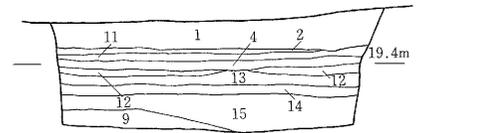
PL.6 中小路西遺跡93-1区平面図及び断面図



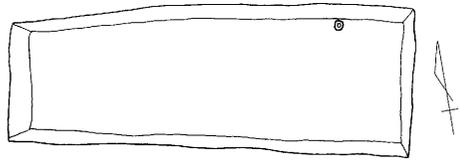


- |               |                |                |
|---------------|----------------|----------------|
| 1 盛土          | 7 灰黄色シルト       | 13 灰褐色シルト(旧耕土) |
| 2 黄橙色粘性シルト    | 8 褐色シルト        | 14 黄褐色シルト(ク)   |
| 3 灰色砂質シルト     | 9 暗褐色礫混じりシルト   | 15 褐灰色シルト(ク)   |
| 4 灰色シルト       | 10 褐色礫         | 16 暗灰色砂礫       |
| 5 灰褐色シルト(旧耕土) | 11 黄灰色礫混じり粘土   | 17 橙色粘土混じり礫    |
| 6 黄灰色シルト(旧床土) | 12 灰黄色シルト(旧耕土) |                |

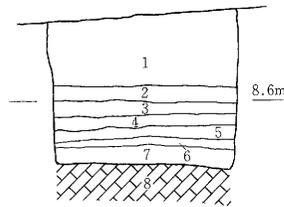
BS93-1区 断面図



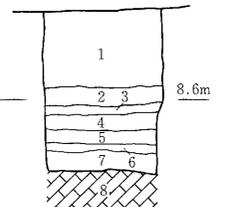
- |          |
|----------|
| 1 盛土     |
| 2 褐灰色シルト |
| 3 黄白色粘質土 |



OKD93-2区 平面図及び断面図



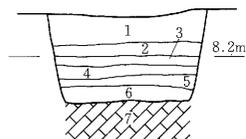
西壁



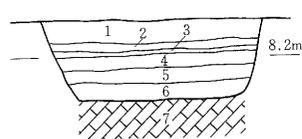
北壁

- |         |               |
|---------|---------------|
| 1 盛土    | 5 褐色混じり灰色砂質土  |
| 2 暗灰色土  | 6 黄褐色砂質土      |
| 3 暗黄褐色土 | 7 マンガン混じり褐灰色土 |
| 4 灰色砂質土 | 8 淡黄灰色粘土      |

OKD93-1区 断面図



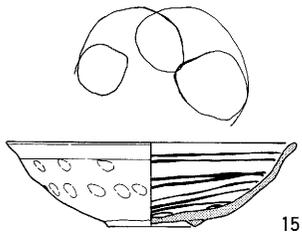
第2トレンチ北壁



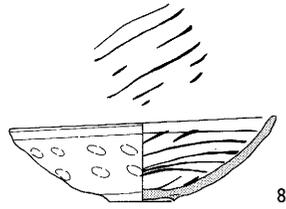
第1トレンチ北壁

- |                 |
|-----------------|
| 1 暗灰色土          |
| 2 暗黄灰色土         |
| 3 黄褐色混じり灰色土     |
| 4 灰色砂質土         |
| 5 マンガン混じり灰黄色砂質土 |
| 6 マンガン混じり黄褐色土   |
| 7 黄白色粘土         |

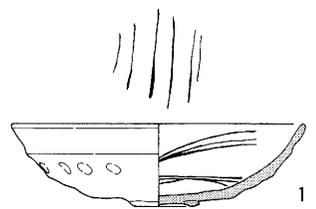
OKD92-1区 断面図



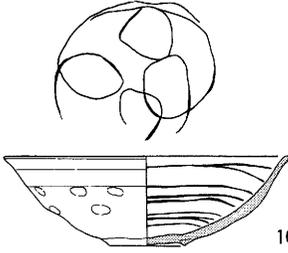
15



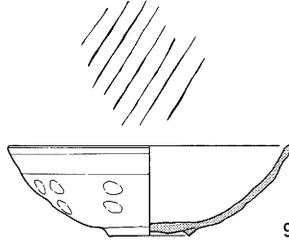
8



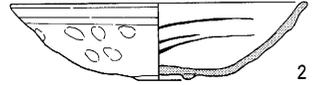
1



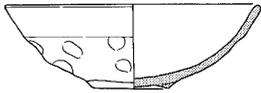
16



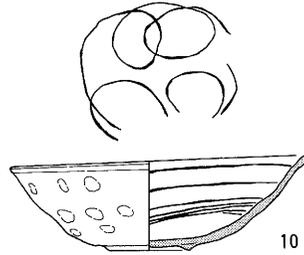
9



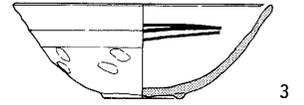
2



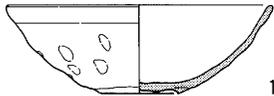
17



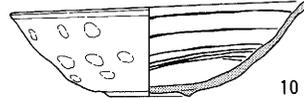
10



3



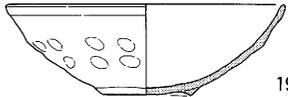
18



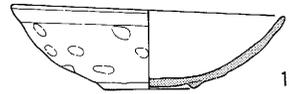
11



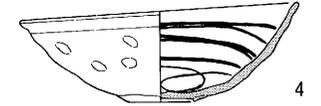
4



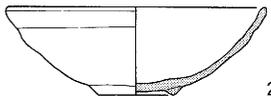
19



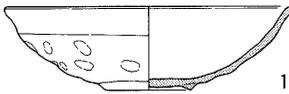
12



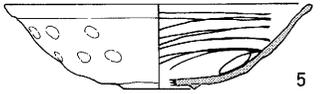
5



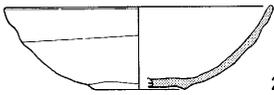
20



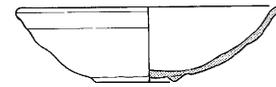
13



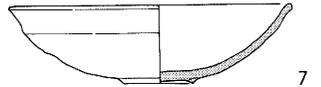
6



21



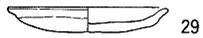
14



7



33



29



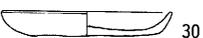
25



22



34



30



26



23



35



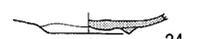
31



28



27



24



32





第1トレンチ (東から)



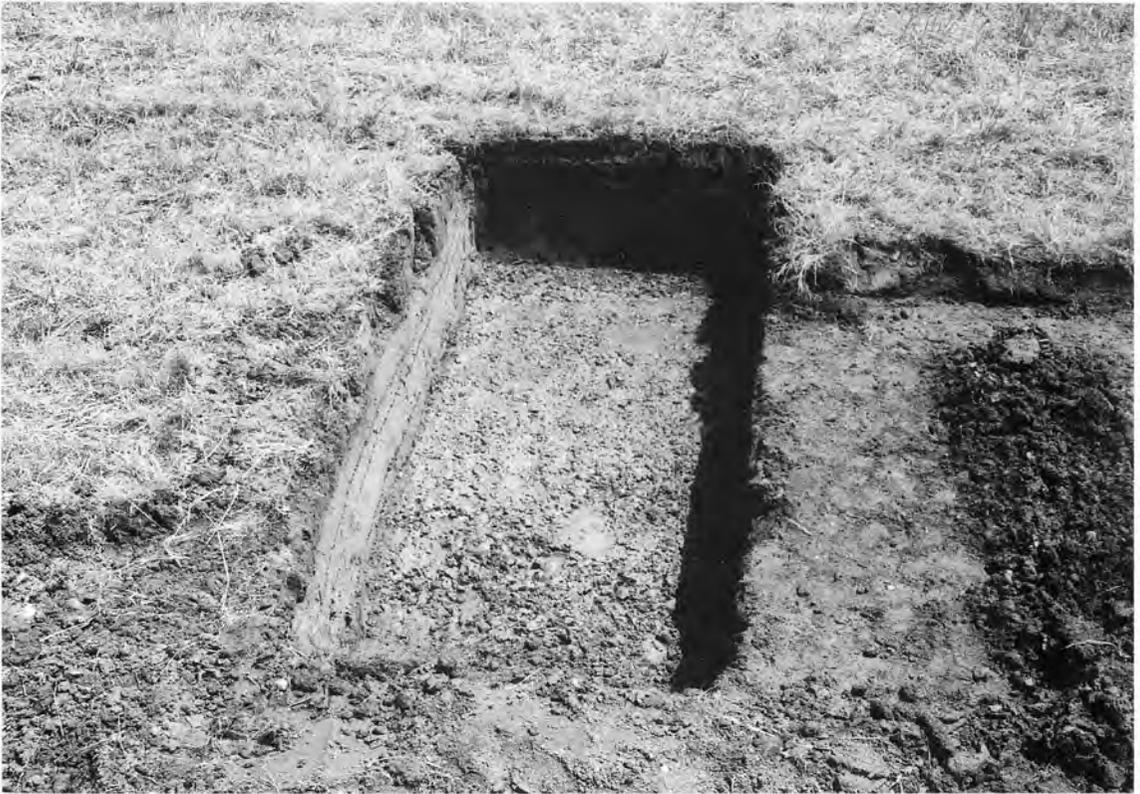
第2トレンチ (南から)



第1トレンチ (北から)



第2トレンチ (南から)



93-2区第3トレンチ (東から)



93-3区 (南から)



93-4区 (南から)



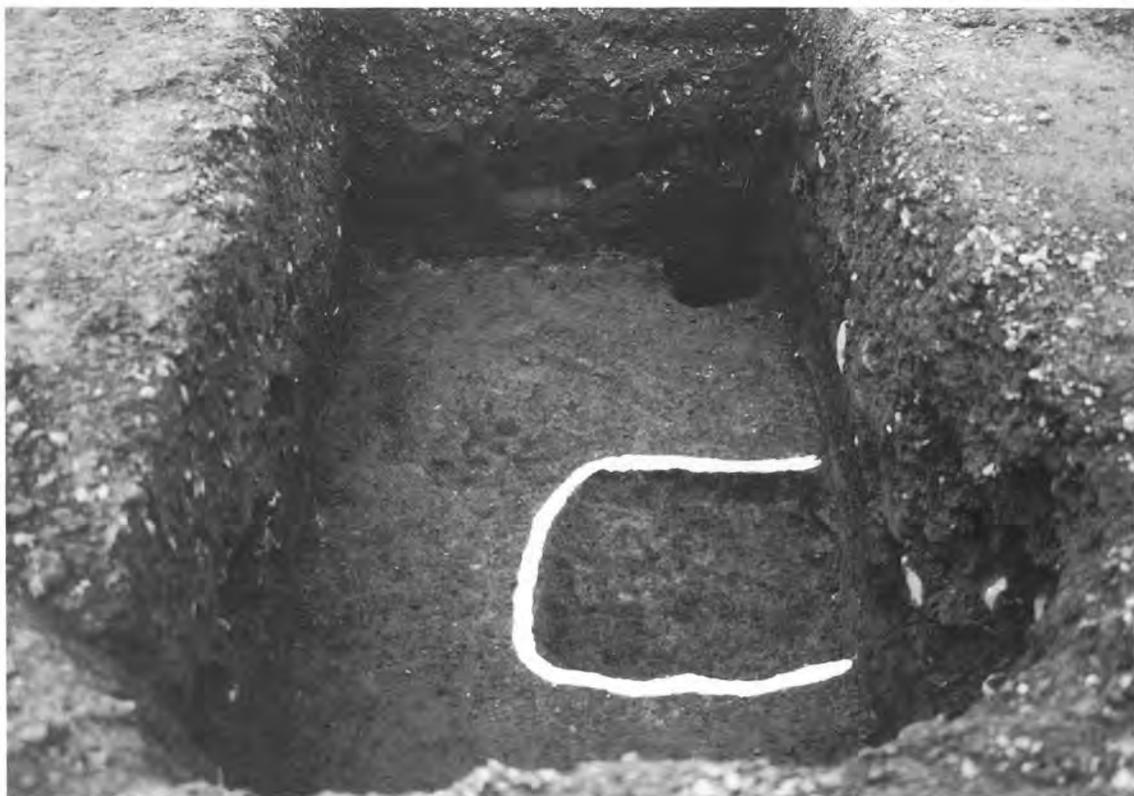
93-5区 (西から)



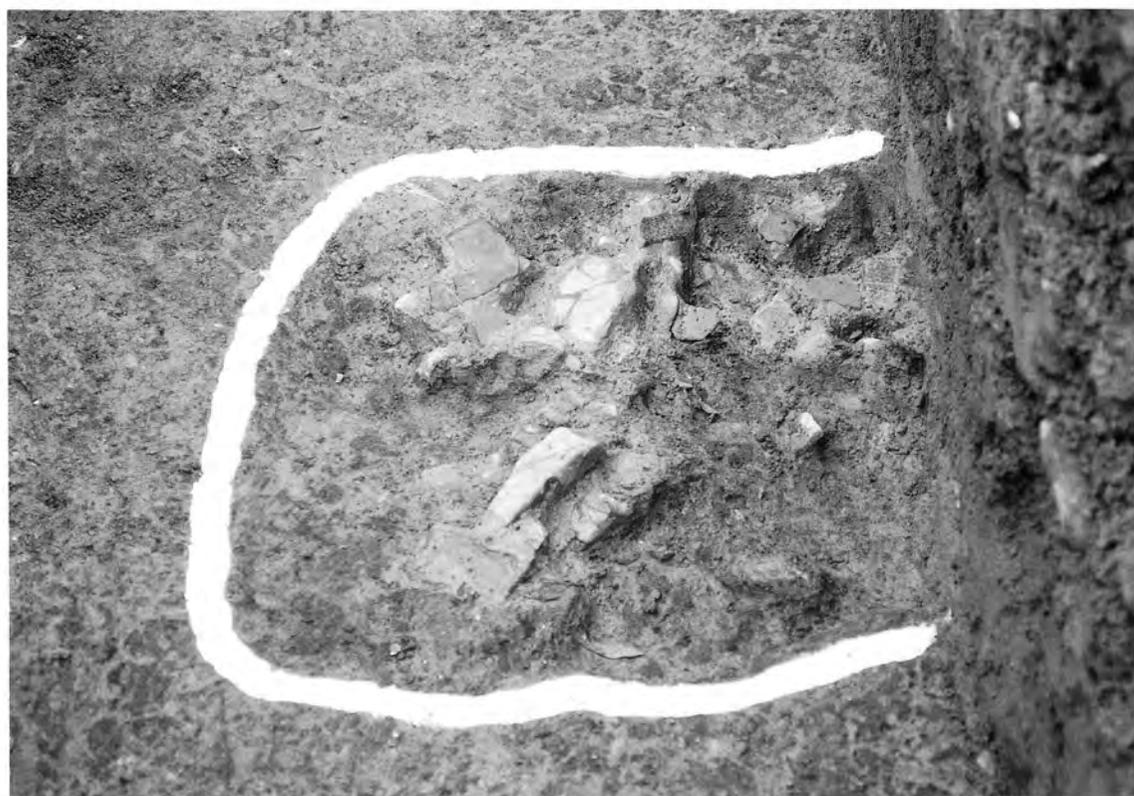
93-6区 (南から)



92-10区 (北から)



93-1区 (西から)



同上 SK01遺物出土状況 (西から)



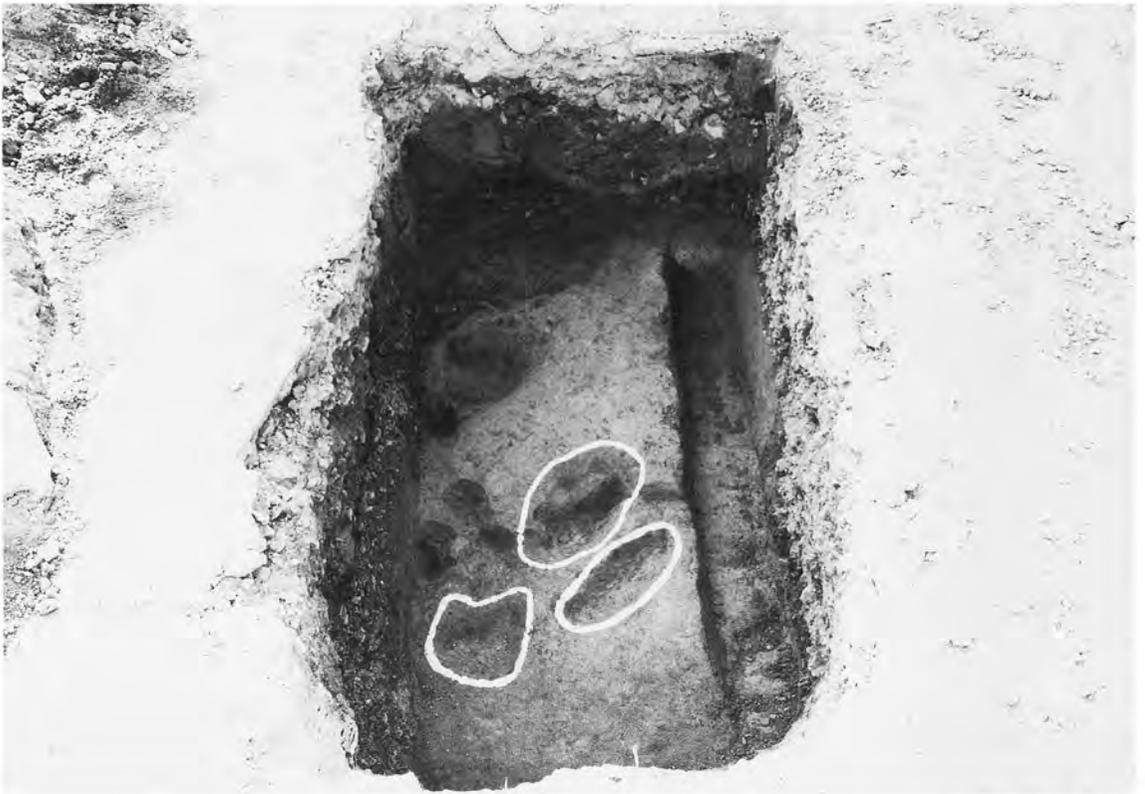
第1トレンチ (西から)



第2トレンチ (南から)



92-2区 (東から)



92-3区 (東から)



OK93-1区 (東から)



KG93-1区 (南から)



第1トレンチ (南から)



第2トレンチ (南から)



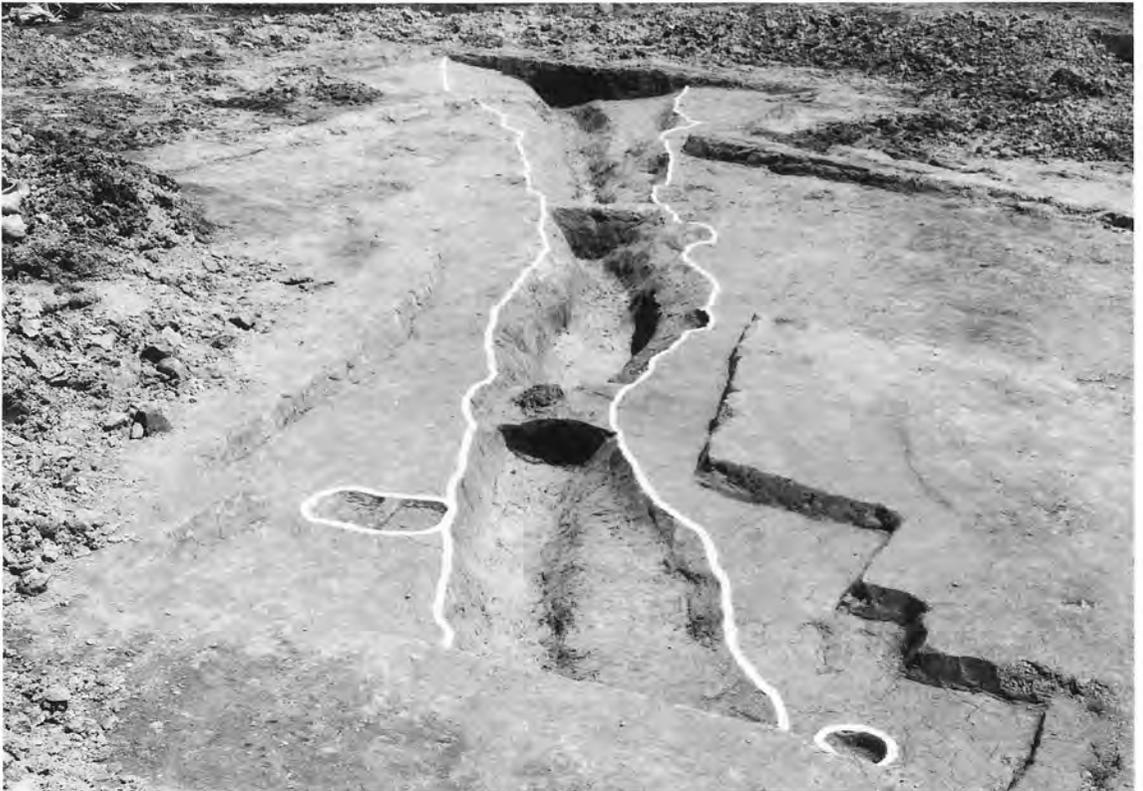
第1トレンチ (北から)



第2トレンチ (西から)



全景 (西から)



SD01 (西から)



SD01 (東から)



同上 詳細 (西から)



瓦器碗出土状況（南から）



同上（西から）



第1トレンチ (東から)



第2トレンチ (南から)



BS93-1区第3トレンチ (南から)



OKD93-1区 (南から)



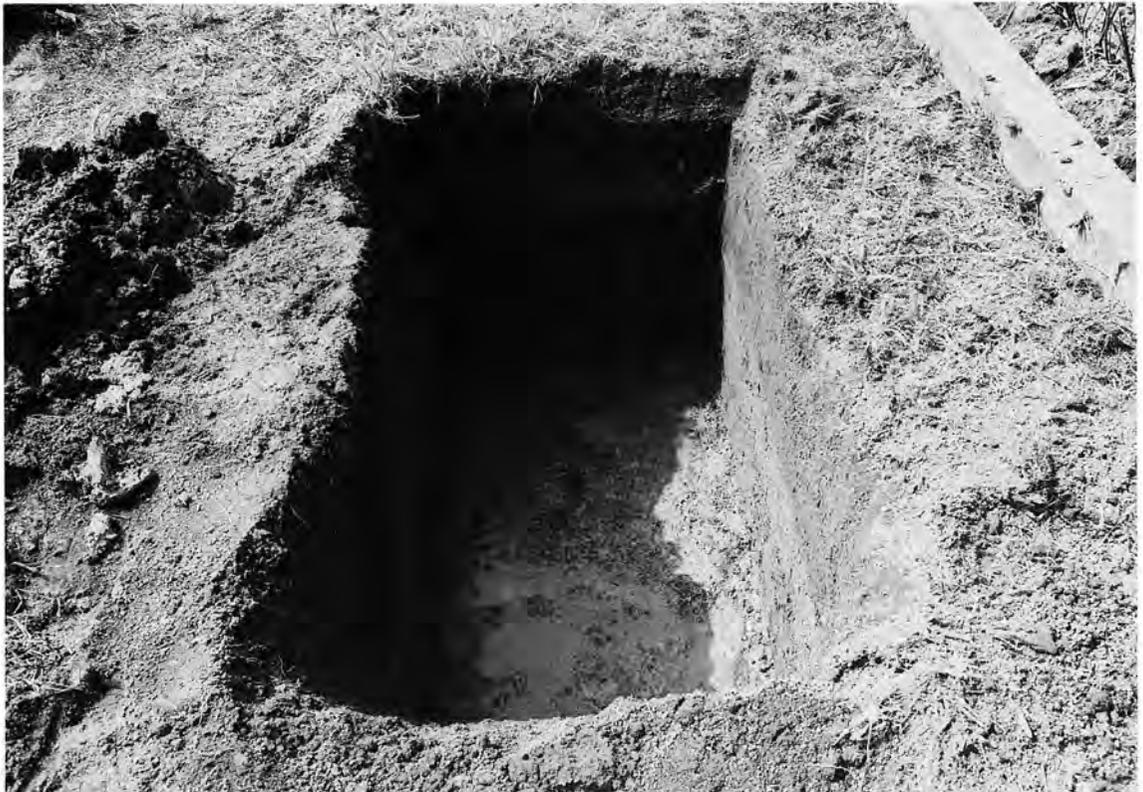
93-2区 (西から)



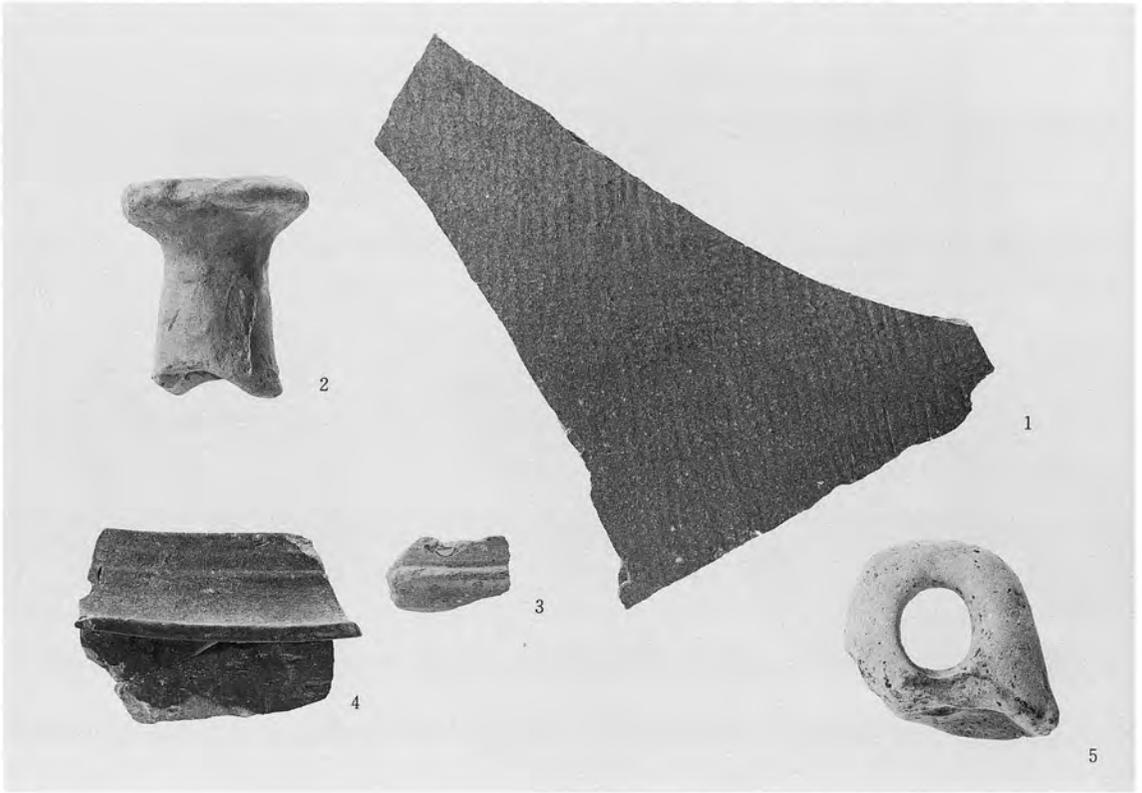
同上 (南から)

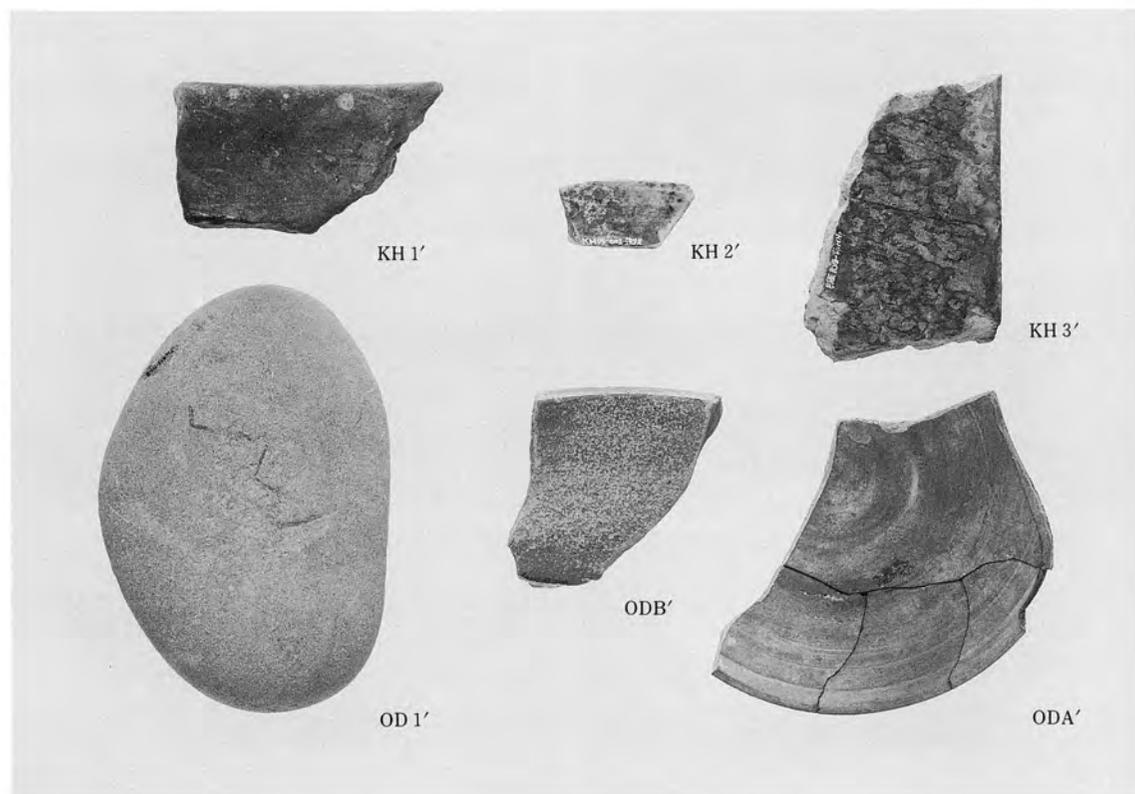
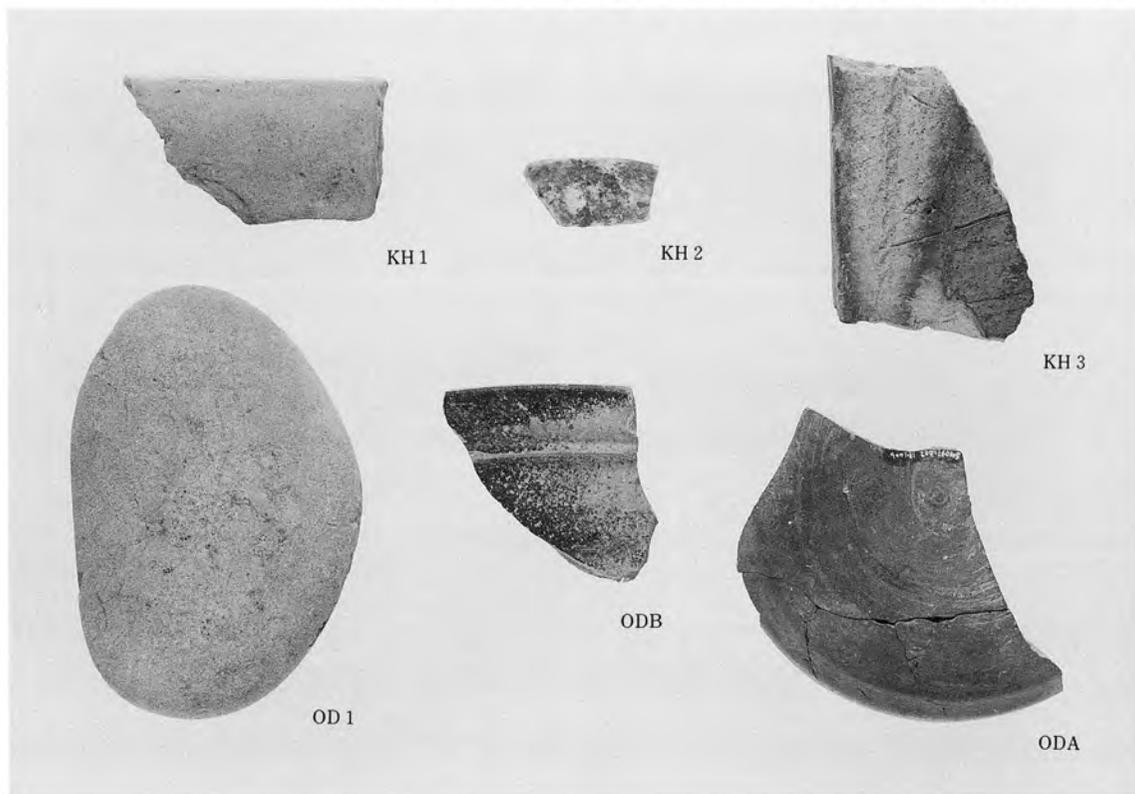


第1トレンチ (東から)



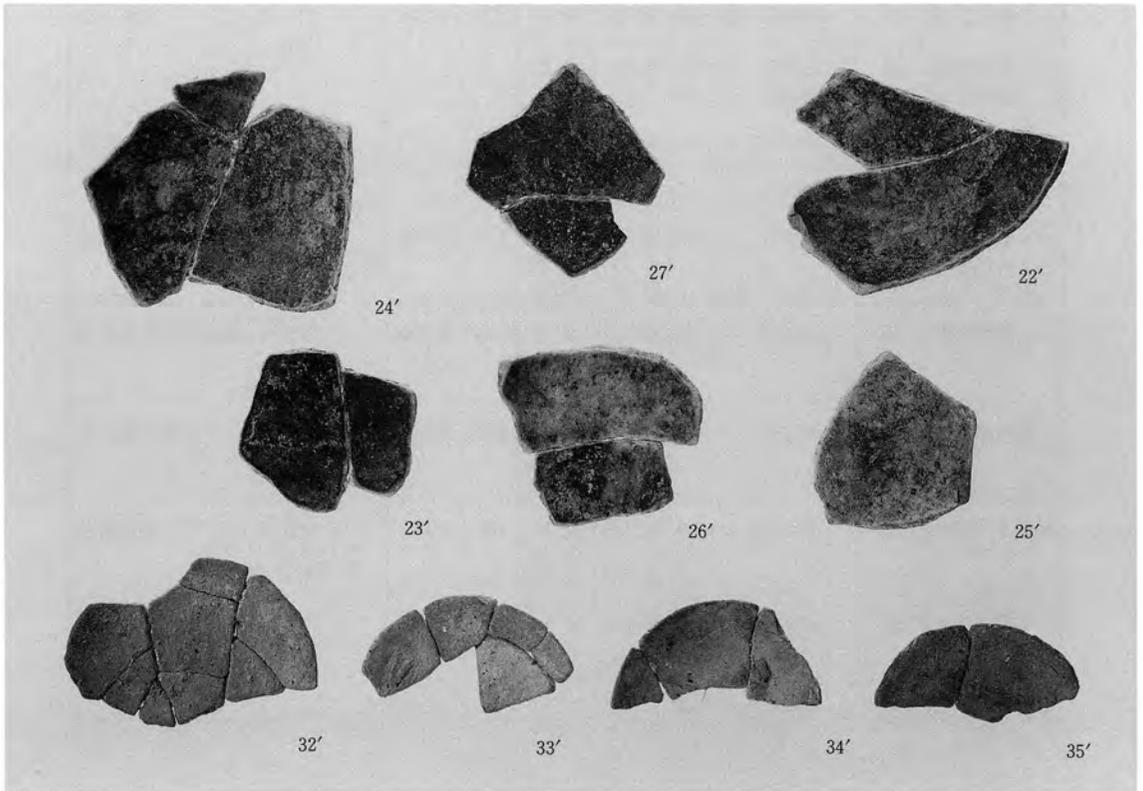
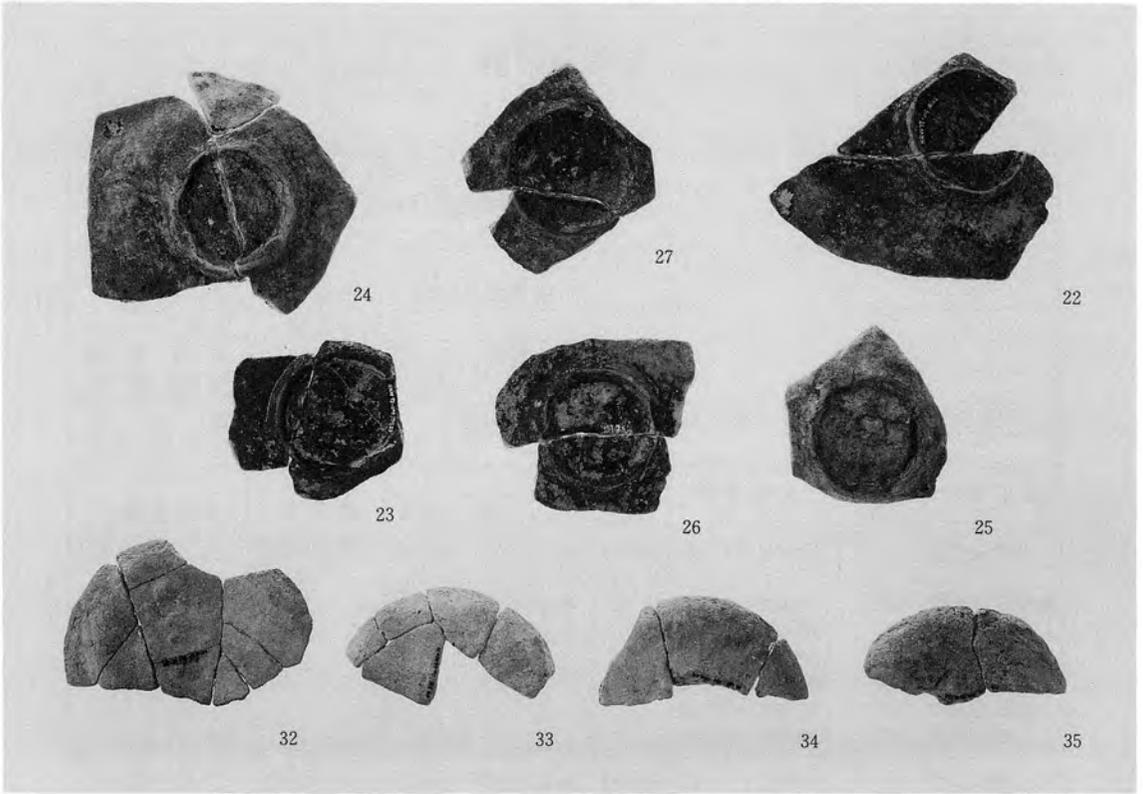
第2トレンチ (東から)











# 報告書抄録

ふりがな	せんなんし いせきぐんはくつちょうさほうこくしょ 11							
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書							
副書名	—							
巻次	XI							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第二十五集							
編著者名	仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡 一彦							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-05 大阪府泉南市樽井一丁目1番1号 TEL.0724(83)0001							
発行年月日	西暦 1994年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさといせき 男里遺跡	おおさか せんなんし 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	ON	34度 21分 30秒	135度 15分 40秒	93-1 199304	8	住宅新築
						93-2 199305	39	共同住宅新築
						93-3 199309	3	住宅新築
						93-4 199304	6	住宅新築
						93-5 199306	13	店舗新築
						93-6 199310	8	宅地造成
						92-10 199302	4	住宅新築
こうへいじあと 光平寺跡	せんなんし 泉南市 おのさと 男里	27228	KH	34度 21分 30秒	135度 15分 27秒	93-1 199312	4	住宅新築
はたしろいせき 幡代遺跡	せんなんし 泉南市 はたしろ 幡代	27228	HT	34度 21分 09秒	135度 16分 08秒	93-2 199310	8	住宅新築
						92-2 199302	5	住宅新築
						92-3 199302	3	住宅新築
おかなかいせき 岡中遺跡	せんなんし 泉南市 しんだちおかなか 信達岡中	27228	OK	34度 20分 51秒	135度 16分 37秒	93-1 199307	4	住宅新築
						93-2 199308	12	住宅新築
かいごいけいせき 海宮宮池遺跡	せんなんし 泉南市 しんだちおのしろ 信達大苗代	27228	KG	34度 22分 11秒	135度 17分 21秒	93-1 199304	5	住宅新築
しんげおどりやまいせき 新家オドリ山遺跡	せんなんし 泉南市 しんげ 新家	27228	OD	34度 22分 24秒	135度 18分 05秒	93-1 199305	12	住宅新築
なこうじにしいせき 中小路西遺跡	せんなんし 泉南市 なこうじ 中小路	27228	NKW	34度 22分 20秒	135度 16分 51秒	93-1 199307	106	遊技場新築
ぶつしょうじあと 仏性寺跡	せんなんし 泉南市 しんだちいちもぼ 信達市場	27228	BS	34度 22分 07秒	135度 17分 07秒	93-1 199307	71	共同住宅新築
おかだいせき 岡田遺跡	せんなんし 泉南市 おかだ 岡田	27228	OKD	34度 22分 39秒	135度 16分 45秒	93-1 199306	4	住宅新築
						93-2 199306	7	倉庫新築
						92-1 199303	6	住宅新築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男里遺跡					
93-1	集落	古墳	柱掘方 1	須恵器・土師器など	掘立柱建物の存在を推定。 様々な時代の包含層を確認。 旧河道と思われる堆積を確認。  自然堤防の堆積確認。
93-2	—	古墳 中世 不明	—	須恵器 瓦質土器・蛸壺など 土師器など	
93-3	—		—		
93-4	集落		不明		
93-5	—	不明	—	土師器など	
93-6	—	近代	—	播鉢・瓦など	
92-10	—	不明	—	土師器など	
光平寺跡	社寺	中世	土坑 1基	土師器・瓦器・瓦など	
幡代遺跡					
93-2	—	不明	—	—	遺跡内における氾濫原を確認。
92-2	—	不明	—	土師器など	
92-3	集落	不明	土坑 3基	—	
岡中遺跡					
93-1	集落	中世?	ピット 2 土坑 1基	瓦器など	遺跡内で初めて集落関連遺構を確認。
93-2	—	不明	—	土師器など	
海宮宮池遺跡	—	不明	—	—	当遺跡初の調査。 海宮宮池堤体構造の一部を解明。
新家オドリ山遺跡	古墳?	弥生 古墳	溝 1条	敲石 須恵器 (採集遺物)	付近に古墳痕跡の存在をうかがわせる。
中小路西遺跡	集落?	中世	溝 1条 土坑 1基 ピット 1	瓦器碗 27個体 瓦器小皿 1個体 土師器小皿 7個体	当遺跡初の調査。 中世の大規模水田開発に使用された水路か。溝埋土から良好な一括資料も確認。
仏性寺跡	集落?	近代	整地層	瓦	伽藍の範囲を限定する。
岡田遺跡					
93-1	—	不明	—	土師器など	
93-2	集落	中世?	ピット (杭穴?) 1	須恵器 (中世)	
92-1	—	—	—	土師器など。	



